

---

# 兄と学園とバカ騒ぎ

颯槻

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

兄と学園とバカ騒ぎ

### 【Nコード】

N0118N

### 【作者名】

颯槻

### 【あらすじ】

俺は藤田 龍槻<sup>ふじたりゅうつき</sup>。16歳。曲がった事が大っ嫌いで、悪さするやつを見付ければ即フルボッコ。万年五月病発症者で中二病持ち。学校は文月学園2年生生徒。今は連日バイトで暮している。

果たしてこんなやつが主人公でいいのだろうか。  
まあ見てやってください

## プロローグ・兄と妹と自己紹介（前書き）

バカテスにオリジナルの主人公が登場する小説です。

## ブログ・兄と妹と自己紹介

俺は藤田 ふじたりゆつき 龍槻。 16歳。 曲がった事が大っ嫌いで、悪さするやつを見付ければ即フルボッコ。 万年五月病発症者で中二病持ち。

学校は文月学園2年生生徒。 今は連日バイトで暮している。

文月学園に入った理由は単純明解。 学費が安いから。 ただでさえ家計が危ないんで結構助かっている。

親は俺が10歳の時に交通事故で他界。 6歳になる妹と二人暮しだ。

「ふわあゝあ。 お兄ちゃんおはよゝ」

「おはよう。 さっさと顔洗ってご飯にするぞ」

「はい」

そして妹の夢華 ゆめか。 6歳。 親が名前を付ける前に他界したため俺が名前を付けた。

小学2年生なのに結構しつかりしているから俺も安心して学校終わりにバイトに行ける。

「しつかり顔洗ってきたな？ さてご飯にするか」

「うん！ いただきます！」

「いただきます」

俺は白米に味噌汁と焼き魚の和食。 夢華はトーストにスープの洋食だ。

「今日から学校だろ？ 忘れ物は無いか？」

「もちろん無いよ。 そういうお兄ちゃんこそ忘れ物ないよね？」

「あるわけないだろ。 忘れたとしても勉強道具だけさ」

「それこそいけないんじゃない……」

「はははっ冗談、冗談。 全部鞆に入ってるって。 兄ちゃんも今日から学校だからな」

そんな冗談なんかもかましつつ楽しい朝食をとる。

「あ、そうだ再来週の休日、食材の買出しも兼ねて夢華の服買ってやろうか？」

「え、本当に！！ いいの！？」

「ああ、いいとも。ただし2、3着だけな。あんまりお金無いから」  
「それでもいいよ。お洋服買ってくれるなら」

「よし、じゃあ再来週の日曜日に行くか」

「うん！」

腕時計に目をやってみる。現在時刻7時40分。

「おおっとやばい。もう時間だぞ」

「うん。分かった」

慌てて片付けつつ、夢華に早く食べるよう促<sup>うな</sup>がした。

5分後、家から出て夢華と学校まで通学。

夢華のいく学校は家から歩いて5分の所にあり。文月学園までは歩いて10分。

夜は遅くまでバイトのため夢華会えるのは朝と通学途中しかない。

「夢華。今日もいつも通り兄ちゃんはや遅くなるから、ちゃんと家の鍵をして、しっかりご飯を食べて、歯も磨いて10時までには寝ること。分かったな？」

「分かってるよ、そんなこと。じゃあいつてきまーす！」

「いつてらっしゃーい。気をつけてなー」

無事、夢華を見届け俺も学校へ向かった。

## ブローグ・兄と妹と自己紹介（後書き）

「ねえねえお兄ちゃん。なんかお兄ちゃんの独り言が多くない？」

「ん？そんなことはないと思うぞ。まあそんなことより次回予告するぞ」

「はい」

「次回、『兄と学園とバカ騒ぎ：第一話・バカとクラスと仲間達』お楽しみに！！」

「え、お兄ちゃんってバカなの？」

「いや、お兄ちゃんは少なくともバカじゃないぞ」

## 第一話・バカとクラスと仲間達（前書き）

果たしてこんなのでいいのだろうかww

## 第一話・バカとクラスと仲間達

### 文月学園

新設校にして、現在世間で最も話題を呼ぶ新技術“試験召喚システム”の試験採用校。

学力低下が嘆かれる昨今に新風を巻き起こし、進学校であると同時に最新技術の実験場としても知られている学校。  
それ故に多くのスポンサーが付いており学費は極めて安い。

「遅いぞ藤田」

「あつおはようございます。西村先せ……鉄人」

「なぜ西村先生と言わずわざわざ言い直して鉄人と呼んだのだ？」

「なんのことですか？」

この肉体派の先生は生徒指導の西村先生。

あだ名は鉄人。趣味のトライアスロンから来たあだ名らしい。

「まあ、いい。ほら、受け取れ」

茶色い封筒を手渡してくる。

「先生。なぜ個人個人にクラス分けの結果を渡すんだ？」

「うちの学校は、いろいろと注目を浴びているのは、知っているな？その為にいろいろと事情があるんだ」

「ふーん」

学校側もいろいろと大変なんだな

「さてと、そんなことより何クラスだろうか」

そーいやあ俺って試験のときどうしてたっけ？まったく覚えてねえや。

「いまさら言う必要はないと思うがAクラスが成績優秀者で、Fクラスが最下層だぞ？」



「わかってますよ」

鉄人は、何を言ってるんだ？

そんなことよりなかなか封筒が開かない。

べつとりとノリづけされているみたいだな。

めんどくさい。破いてしまえ。

やっと破った封筒の中から、一枚の紙を取り出す。

『藤田龍槻…… Fクラス』

「どうした。お前の学力ならAクラスは無理でもBかCクラスには行けただろうに」

「ああ思い出した。試験の明け方までバイトだったから寝てたんだ」

「お前という奴は……だがクラスの変更は認められんぞ。どーしてもしたいのなら試召戦争でもする事だ」

「めんどくさいんでそんなことしませんよ」

俺はさっさとFクラスに向かった。

なんだこの無駄にバカでかい教室は。

普通のクラスの8倍ぐらいある大きなクラスが目の前に広がっていた。

「ここがAクラスか。フリードクバーとか置いてあるしとても教室に思えないな」

こんなことなんかしてられねえや。さて行くか。

「……ここがFクラスか」

ボロボロの教室を見ながらつぶやいてみた。

外見からでもわかるぐらいかなり酷い。

「すみませーん。遅刻しかけましたー」

「早く座れ、このウジむ……すまない人違いだ」

ん？　なんか言ったのか？　人違いのどこしか聞こえなかった。

「なんであんたが教壇にいるんだ？」

「ああ、先生が遅れているらしいから、代わりに教壇に立ってみた」  
「なんで先生の代わりにあんたが？」

「俺が一応この最高責任者だからな」

「じゃあ、あんたがFクラス代表なのか？」

「ああ、その通りだ」

「で、あんたは何者なんだ？」

「おっと申し送れたな。俺は坂本雄二<sup>さかもとゆうじ</sup>だ。よろしく」

「ああよろしく。俺は藤田龍槻だ。よろしく。で雄二がここの代表  
つてことは」

「つまり、このクラス全員俺の兵隊つてわけだ」  
雄二がニヤリと笑う。

「それにしても、酷いクラスだな」

「ああ、まさかここまでとは」

クラスの状況は、カビが生えた畳に卓袱台に座布団という  
衛生的にも悪そうな環境だった。

「すみません。ちょっと遅れちゃいましたっ」

「早く座れ、このウジ虫野郎」

「つてあれ？　雄二？」

「なんだ。人の顔も覚えられないくらいバカになったのか？」

「ちつ、違うよ。ただなんで雄二が教壇に立っているのかなと思っ  
て」

「ああ、先生が遅れているらしいから、代わりに教壇に立ってみた」  
「なんで先生の代わりに雄二が？」

「俺が一応ここでは、最高責任者だからな」

「えっ？　じゃあ雄二がFクラス代表なの？」

「ああ、その通りだ」

なんだこの漫才は。結構面白いな。

「えー通してもらえますか」

そんなことを話しているとふいに後ろから、声が聞こえた。

そこには、さえないおじさんって言葉が妙に当てはまる人が立っていた。

「後、席についてもらえますか。HRを始めますので」

言葉からして恐らくこの先生だな。

「りょーかい」

「うーす」

俺らはそれぞれ席と言えない席にに着いた。

「えーおはようございます。今日から二年F組の担任を務めます福原真です。よろしく願います」

先生は黒板に名前を書こうとしてやめた。

チョークすらまともに置いてねえのか。

「みなさんちゃんと卓袱台と座布団は、支給されていますか？」

「不備があつたら申し出てください」

俺以外からしたら不備・不満しかないのだろうか。

「先生！ 僕の座布団にほとんど綿が抜けているんですけど」

「あー、我慢してください」

「先生！ 俺の卓袱台の脚が折れているんですけど」

「木工ボンドが支給されますので自分で直してください」

「先生。窓が割れていて寒いんですけど」

「後でビニール袋とセロハンテープの支給を要請しておきます」

「センス！ 女子がほとんどいないんですが」

「自分自身を磨いて頑張ってください」

「基本的に必要なものがあれば、自分で調達してください」  
こりゃ驚きだな。これから一年面白くなりそうだ。  
「では、廊下側の人から自己紹介をお願いします」

「木下秀吉きのしたひでよしじゃ。演劇部に所属してある。よろしく頼むぞい」  
女つばいやつが一番最初の自己紹介のようだ。昔の喋り方してるな。  
たぶん男だろう。

「……………土屋康太つちやしいただ。趣味は盗ちよ……………なんでもない。特技は盗さ……………なんでもない」  
こいついろんな意味で危ないやつだ。まあ試召戦争では偵察に使え  
そうだが。

でも本当に女子がいねえんだな。  
「島田美波しまだみなみです。海外育ちで、日本語は会話できるけど読み書きは  
苦手です」

「あつても英語も苦手で趣味は、」

ん？ 女子の声だ。野郎ばつかじゃ面白くないから嬉しいな。

「趣味は吉井明久を殴ることです」

『吉井明久』？まさかさっきのバカ面か？

「……………うう。し、島田さん」

「吉井、今年もよろしくね」

さっきのバカ面が物凄い震えてた。

さてと次は俺か。

「あーっと、俺は藤田龍規だ。趣味は特にないが、特技は不良を  
見付けたら即フルボッコにする事だ。親が早々に他界し今は妹と二  
人暮らしだ。よろしく頼む」

俺以降の自己紹介は、自分の名前を告げるだけの作業が続き、

「　です。よろしく」

ついにあのバカ面の自己紹介のようだ。

「えっと、吉井明久です。気軽に『ダーリン』って呼んでください

」

「『『『『『ダアアーリーーン!!』『』『』『』『』」

不愉快だ実に不愉快だ。野太い声の合唱がここまで不愉快とは。あのバカ面あとで殺す。

「失礼。忘れてください。とにかくよろしくお願いします」

その後も名前を告げるだけの単調な紹介が続き、眠くなってきた頃に不意にドアが開き

息を切らせて女子生徒が入ってきた。

「あの、遅れてきて、すいま、せん……」

「『『『『『えっ!!』『』『』『』『』」

誰からという訳でもなく、クラス全体から上がった声だ。

その中、平然としている先生がその姿を認めて話しかけた。

「丁度よかったです。今自己紹介をしているところなので姫路さんもお願います」

「あっはい！　あの、姫路瑞樹といいます。よろしくお願いします」  
結構可愛いらしい生徒だな。いや可憐といった方がいいのか？

「はい！　質問です！」

「は、はい。なんですか？」

バカ面がいきなり話し掛けていた。

来ていきなり質問されればそうなるだろう。

「なんでここにいるんですか？」

とらえ方によつては失礼な質問だ。

「そ、その……」

緊張した面持ちで、姫路が答える。

「振り分け試験の最中に高熱を出してしまいまして…」

その言葉を聞きクラスの面々は、成程と頷いていた。試験途中での退席は当然0点扱いとなる。

彼女は、昨年受けた振り分け試験を最後まで受けられなくてここにいるということらしい。

そんな姫路の言い分を聞きクラスの中でもちらほらと言い訳の声が出る。

「そういえば、俺も熱（の問題）が出たせいでFクラスに」

「ああ。化学だろ？あれは難しかったな」

「俺は、弟が事故にあつたと来て実力を出し切れなくて」

「黙れ一人っ子」

「前の晩、彼女が寝かせてくれなくて」

「今年一番の嘘をありがとう」

これは、想像以上にバカだらけだな。

「で、では一年間よろしく願います」

そう言つて彼女はそそくさと、バカ面の近くの席に着いた。

「き、緊張しましたあゝ……」

席について安堵している姫路。

「あの、姫路さ……」

「姫路」

あ、雄二がバカ面の邪魔をしたようだ。

「は、はい！ なんですか？えーと……」

「坂本だ。坂本雄二。よろしく頼む」

「あつ姫路です。よろしく願います」

「ところで姫路。いまだに体調が悪いのか？」

「あつ！ それは、僕も気になる」

「あつ！ よ、吉井君！？」

さつきから驚いてばっかだな姫路。

「姫路。明久がブサイクですまん」

雄二。そこは普通フォローが入るんじゃないのか？

ほらみる。バカ面が段々と自信がなくなってるじゃねえか。

「そ、そんな！ 目もパツチリしているし、顔のラインも細くてきれいだし、全然不細工なんかじゃないですよ。むしろ……」

「そういわれると、そこまで見てくれは悪くないかもしれないな。

俺の知人にも、明久に興味を持っているやつがいたような気がするし」

「え？ それは誰……」

「そ、それって誰ですか！？」

こんなバカ面に興味を持つ奴もいるんだな。

「確か久保……利光だったかな」

久保利光      性別：オス

「……………」

「おい、明久。声を殺してざめざめと泣くな。半分冗談だ安心しろ」

「半分！？ 残り半分は！？」

「ところで姫路、体の調子は大丈夫なのか？」

「あ、はい！ もう大丈夫です」

「雄二！？ なんで取り合ってくれないの！？ 全部冗談なんだよね！？」

やっぱり面白いな。このクラスでよかったかもしれん。

「はいはい。その人たちが静かにしてくださいね」

先生が教卓を叩きながら注意する。

「あ、すいませ」

バキィッ      バラバラバラ……

突如先生の前の教卓が崩れ落ちごみと化す。

まさか、軽く叩くだけで壊れるとは。どこまで最低な設備なんだ。

「えゝ……替えを持ってきますので少し待っていてください」

先生が気まずそうに出て行った。軽くとはいえ、叩いて壊したからだな。

あの場合は、仕方がないと思うんだが。

「あ、あはは……」

姫路が苦笑いしていた。

「……雄二ちよつといい？」

あくびをしている代表にバカ面が声をかける。

「ん？なんだ？」

「ここじゃちよつと話にくいから廊下で」

「じゃあ俺もついて行っていいか？」

「別に俺はかまわんが……」

「え？君だれ？」

「さつき話したと思うがな。藤田龍槻だ」

「へえゝ龍槻ね。よろしく」

俺とバカ面と代表は廊下に出た。

「んで、話つてなんだ？」

「この教室のことなんだけど……」

「Fクラスか。想像以上に酷いな」

「そうだな。これはやりすぎだ」

「雄二も龍槻そう思うよね？」

「「当たり前だ」」

「Aクラスの設備は見た？」

「ああ、すごかったな。教室というかホテルだったな」



一方はチョークすらないひび割れた黒板で、もう一方は、値段も分らないほど立派なディスプレイ。これで、不満を抱かない人間がいる訳がない。

「そこで僕からの提案。二年生になったんだし、試召戦争をやってみない？」

「戦争、だと？」

「うん。しかもAクラス相手に」

「Aクラスだと？正気か？」

「・・・何が目的だ？」

急に雄二の目が細くなる。

「いや、あまりにもひどい設備だから」

「嘘をつくな。まったく勉強に興味がないおまえが、今更勉強用の設備に興味を持つわけないだろ？」

「確かに雄二の言う通りだ。こんなバカ面ならどこでも生きていくのだろ」

「それって酷くない！？興味があればこんな学校に来る訳が

」

「お前がこの学校を選んだ理由は、試験校だからの学費の安さが理由だろ？」

「俺もそうなんだがな。バイトで暮らしてるから結構助かる」

「あー、えっと、それはその……」

「大方、姫路のためだろう？」

「どうやら図星らしい。ビクツと体がこわばってるからな。」

「ど、どうしてそれを・・・」

「おまえの行動などを見ていれば大体分かる」

「まあそうだろうな。バカ面だし」

「ねえさつきからバカ面バカ面ってほかの呼び方ないの!？」

「はいはい。言い訳は必要ないからな」

図星だけに反論が出来ないようだ。

「うう・・・」

「気にするな。おまえに言われなくても俺自身がAクラスに仕掛けようと思っただけだから」

「え！ どうして？」

「そうだったのか雄二の方が教室の設備に関心が無いと思ってたんだが。」

「世の中学力がすべてじゃないって、そんな証明を試みたくな」  
「なるほどな」

「???」

「おおっと先生が戻ってきたみたいだな。クラスに入るぞ」

「あ、うん」

「りょーかい」

「さて、それでは自己紹介の続きをお願いします」

すがわりよう  
「須川亮です。FFF団の・・・」

また、淡々とした自己紹介が始まった。

「坂本君。あなたが最後の一人ですよ」

「了解」

「Fクラス代表の坂本雄二だ。呼び方は、坂本でも代表でも好きに呼んでくれ」

Fクラスの代表と言っても最下層のトップだから、基本的にこいつらとは変わらないバカだ。

「さて、皆に一つ聞きたい」

全員の視線が雄二に集まったところで、雄二は教室を見渡す。

かび臭い教室。

古く汚れた座布団。

薄汚れた卓袱台。

つられて、俺らもその備品を見る。

「Aクラスは、冷房完備のうえ、リクライニングシートらしいが不満はないか？」

「…………大ありじゃあっ！！」「…………」

二年F組、魂の叫び

俺は叫んでないが。

その言葉を境に皆が文句を言い始めた。

「いくら学費が、安いからってこの設備はあんまりだ」

「Aクラスの奴らも同じ学費だろ？あまりにも、差が大きすぎる」

「大体、なんで座布団なんだよ？ Eクラスでも椅子があるのに。不公平だ」

「みんなの意見はもつともだ。そこで、俺たちFクラスはAクラスに『試験召喚戦争』を仕掛けようと思う。」

Aクラスへの宣戦布告か。

それは、Fクラスにとっては無謀すぎる行動だ。

「勝てるわけがない」

「姫路さんがいたら何もいらない」

そんな文句がいたるところから出る。

「そんなことはない。必ず勝てる。いや、勝たせて見せる」

「何をばかなことを」

「できるわけがないだろ」

クラス中からもっともな意見が上がる。

確かに現実的に見て勝てるはずがない。

だが、Fクラスの代表はあの雄二だ。少しの時間でも見ただけで解かる。

「根拠ならあるさ。このクラスには、試召換戦争で勝つことのできる要素が揃っている」

こんな雄二の言葉を受けて、クラスがざわめく。

「それを今から証明してやる」

ニヤリと笑みを浮かべて全員を見下す代表。

「おい。康太。畳に顔をつけて姫路のスカートを覗いてないで前に来い」

「……………！！（ブンブン）」

「は、はわっ」

あわててスカートの押さえる姫路と必死になって顔と手を左右に振り否定のポーズをとる康太と呼ばれた男子生徒。

あんな堂々と覗けるなんてある意味ですごいな。

「土屋康太。こいつがあの有名人、ムツツリー二だ」

「……………！！（ブンブン）」

その名は、男子生徒には畏怖（いけいいふ）と一畏敬を、女子生徒には軽蔑を以って挙げられるらしい。

「ムツツリー二だと！？」

「馬鹿な、奴がそうだというのか・・・！？」

「だが見る。あそこまで明らかな証拠をいまだに隠そうとしているぞ・・・」

「ああ。ムツツリの名に恥じない姿だ・・・」

顔に付いた畳の後を未だに押さえて隠している姿を見て哀れに思う。

「姫路のことは、説明する必要もないだろう。皆だってその力はよく知っているはずだ」

「えっ？ 私ですか？」

「ああ、うちの主戦力だ。期待している」

「そうだ！姫路さんが、いるならいけるかも！」

「姫路さんサイコー！！」

誰だ？さつきから姫路にラブコールを送っている奴は。うるせえなあ。マツハでフルボッコにしてやるうか。

「それに、木下秀吉もいる」

「木下ってあのAクラスの木下優子の姉妹？」

「秀吉。付き合ってくれー」

ん？おかしくないか？こいつは男子だろ？  
後、姫路だけでなく、こいつまでもか・・・  
うるせえからあとでフルボッコにしようか。

「もちろん、俺も頑張る」

「そういえば坂本って昔、神童とか呼ばれてたんだっけ」

「それが本当ならAクラス級が二人もいるってことじゃん！」

「これは、勝てるんじゃないのか!？」

Fクラスメンバーの士気がかなり上がって。さすが雄二だな。

「そして、吉井明久もいる」

1  
 2  
 3  
 4  
 5  
 6  
 7  
 8  
 9  
 10  
 11  
 12  
 13  
 14  
 15  
 16  
 17  
 18  
 19  
 20  
 21  
 22  
 23  
 24  
 25  
 26  
 27  
 28  
 29  
 30  
 31  
 32  
 33  
 34  
 35  
 36  
 37  
 38  
 39  
 40  
 41  
 42  
 43  
 44  
 45  
 46  
 47  
 48  
 49  
 50  
 51  
 52  
 53  
 54  
 55  
 56  
 57  
 58  
 59  
 60  
 61  
 62  
 63  
 64  
 65  
 66  
 67  
 68  
 69  
 70  
 71  
 72  
 73  
 74  
 75  
 76  
 77  
 78  
 79  
 80  
 81  
 82  
 83  
 84  
 85  
 86  
 87  
 88  
 89  
 90  
 91  
 92  
 93  
 94  
 95  
 96  
 97  
 98  
 99  
 100  
 101  
 102  
 103  
 104  
 105  
 106  
 107  
 108  
 109  
 110  
 111  
 112  
 113  
 114  
 115  
 116  
 117  
 118  
 119  
 120  
 121  
 122  
 123  
 124  
 125  
 126  
 127  
 128  
 129  
 130  
 131  
 132  
 133  
 134  
 135  
 136  
 137  
 138  
 139  
 140  
 141  
 142  
 143  
 144  
 145  
 146  
 147  
 148  
 149  
 150  
 151  
 152  
 153  
 154  
 155  
 156  
 157  
 158  
 159  
 160  
 161  
 162  
 163  
 164  
 165  
 166  
 167  
 168  
 169  
 170  
 171  
 172  
 173  
 174  
 175  
 176  
 177  
 178  
 179  
 180  
 181  
 182  
 183  
 184  
 185  
 186  
 187  
 188  
 189  
 190  
 191  
 192  
 193  
 194  
 195  
 196  
 197  
 198  
 199  
 200  
 201  
 202  
 203  
 204  
 205  
 206  
 207  
 208  
 209  
 210  
 211  
 212  
 213  
 214  
 215  
 216  
 217  
 218  
 219  
 220  
 221  
 222  
 223  
 224  
 225  
 226  
 227  
 228  
 229  
 230  
 231  
 232  
 233  
 234  
 235  
 236  
 237  
 238  
 239  
 240  
 241  
 242  
 243  
 244  
 245  
 246  
 247  
 248  
 249  
 250  
 251  
 252  
 253  
 254  
 255  
 256  
 257  
 258  
 259  
 260  
 261  
 262  
 263  
 264  
 265  
 266  
 267  
 268  
 269  
 270  
 271  
 272  
 273  
 274  
 275  
 276  
 277  
 278  
 279  
 280  
 281  
 282  
 283  
 284  
 285  
 286  
 287  
 288  
 289  
 290  
 291  
 292  
 293  
 294  
 295  
 296  
 297  
 298  
 299  
 300  
 301  
 302  
 303  
 304  
 305  
 306  
 307  
 308  
 309  
 310  
 311  
 312  
 313  
 314  
 315  
 316  
 317  
 318  
 319  
 320  
 321  
 322  
 323  
 324  
 325  
 326  
 327  
 328  
 329  
 330  
 331  
 332  
 333  
 334  
 335  
 336  
 337  
 338  
 339  
 340  
 341  
 342  
 343  
 344  
 345  
 346  
 347  
 348  
 349  
 350  
 351  
 352  
 353  
 354  
 355  
 356  
 357  
 358  
 359  
 360  
 361  
 362  
 363  
 364  
 365  
 366  
 367  
 368  
 369  
 370  
 371  
 372  
 373  
 374  
 375  
 376  
 377  
 378  
 379  
 380  
 381  
 382  
 383  
 384  
 385  
 386  
 387  
 388  
 389  
 390  
 391  
 392  
 393  
 394  
 395  
 396  
 397  
 398  
 399  
 400  
 401  
 402  
 403  
 404  
 405  
 406  
 407  
 408  
 409  
 410  
 411  
 412  
 413  
 414  
 415  
 416  
 417  
 418  
 419  
 420  
 421  
 422  
 423  
 424  
 425  
 426  
 427  
 428  
 429  
 430  
 431  
 432  
 433  
 434  
 435  
 436  
 437  
 438  
 439  
 440  
 441  
 442  
 443  
 444  
 445  
 446  
 447  
 448  
 449  
 450  
 451  
 452  
 453  
 454  
 455  
 456  
 457  
 458  
 459  
 460  
 461  
 462  
 463  
 464  
 465  
 466  
 467  
 468  
 469  
 470  
 471  
 472  
 473  
 474  
 475  
 476  
 477  
 478  
 479  
 480  
 481  
 482  
 483  
 484  
 485  
 486  
 487  
 488  
 489  
 490  
 491  
 492  
 493  
 494  
 495  
 496  
 497  
 498  
 499  
 500  
 501  
 502  
 503  
 504  
 505  
 506  
 507  
 508  
 509  
 510  
 511  
 512  
 513  
 514  
 515  
 516  
 517  
 518  
 519  
 520  
 521  
 522  
 523  
 524  
 525

「雄二！なんでぼくの名前をそこで上げるの？」

「誰だそいつ？」

「ってかそんなのクラスにいたけ？」

な、何て連中だ。さっきの気持ち悪い『ダゝリン』発言の元を忘れやがったか。

「ふっ！明久をなめるなよ。こいつは、『観察処分者』だ！」

## 第一話・バカとクラスと仲間達（後書き）

「おいバカ面。『観察処分者』ってのは何なんだ？」

「ねえ酷過ぎない！？ 君は何度僕の事をバカ面って言ったら気が済むの！？」

「いいじゃねえか。そんなことよりもさっさと次回予告しちまおうぜ」

「酷過ぎるよ……」

「次回、『兄と学園とバカ騒ぎ：第二話・俺とクラスと前準備』お楽しみに！！」

「ついに試召戦争の開幕だね気合入れないと」

「こーいうのって確か死亡フラグじゃなかったか？」

## 第二話・俺とクラスと前準備（前書き）

ちよくちよくオリジナルの主人公がでています。



## 第二話・俺とクラスと前準備

「明久は、『観察処分者』だ！」

クラスの皆がそれを聞いた後、ざわめきだした。

「『観察処分者』って確か……」

「バカの代名詞じゃなかったけ？」

「ち、違うよ！ただちよつとお茶目な16歳につけられる愛称で」「そうだ！バカの代名詞だっ！」

「雄二！？そこは、フォローするところだよね！？なんで肯定しているの！？」

バカ面、それが雄二のフォローだ。

「それってどういうものなんですか？」

姫路とは、無縁なものそうだからな。知らなくても不思議じゃねえな。

そこで雄二が説明を始める。

「具体的には、教師の雑用係だな。力仕事などの雑用を特例として物に触れるようになった試験召喚獣でこなすといって具合だな」

「へえ」。すごいんですね。試験召喚獣は、見た目より力持ちって聞いたことがありますから、そんなことができるなら便利ですね」

「いやいや、そんなことないよ」

あれって実際に大したことない和无いんじゃないか？確かに試験召喚獣は、見た目と違って力持ちがだ先生の監視下でないと呼べないらしいしフィードバックシステムがある。

試験召喚獣の痛みや疲労の何割かが、召喚者自身に返ってくるといふものだ。

「おいおい、『観察処分者』ってことは試験召喚獣がやられると、本人も苦しいってことだろ？」

「まじかよ。じゃあ、おいそれと召喚できない奴が一人いるってことじゃないか」

「まあ、居てもいなくても同じような雑魚だから、関係ないがな」  
雄二、お前はバカ面の友達なのか？時々不安になるぞ。

「とにかくまずは、手始めにDクラスを征服してみようと思う。全員筆を執れ！！出陣の準備だ！！」

「……………おおーっ！！……………」

「俺たちに必要なのは、卓袱台ではなくシステムデスクだ」

「……………うおおーっ！！……………」

「そこで、明久にはDクラスへの宣戦布告の使者になってもらおう」

「雄二！下位勢力の使者って、たいてい酷い目にあうよね？」

「はあ、明久。テレビの見過ぎじゃないか？大丈夫だ。お前に危害を加えることはない」

「…………………………」

このあとのことが丸見えだ。

「騙されたと思って行って来い。俺は、友人を騙したりしない」

「分かったよ。僕がDクラスへの使者になるよ」

「ああ、頼んだぞ」

バカ面って本当にバカなんだな。

「騙されたあつ！」

「やはりそうきたか」

なんて平然と口にしゃがった。しかも笑ってやがる。

「やはりってなんだよ！やっぱり使者への暴行は予想通りだったんじゃないか！」

「当然だ。そんなことも予想できないで代表が務まるか」

「少しは悪びれるよ！」

「落ち着けバカ面。バカ面がマヌケ面になるぞ」

「そんなこと言われて落ちついてられるかつー！」

まあ普通はそうだな。こいつならこれで落ち着くと思ったが。

「吉井君、大丈夫ですか？」

「本当に大丈夫、吉井？」

いい感じにぼろぼろになっているバカ面の様子を見て、姫路と島田が心配していた。

だが見た目ほど酷くはなさそうだな。

「あ、うん。大丈夫だよ。ほとんどかすり傷だから」

「そう良かった……うちがまだ殴る余地は、あるんだ」

「ああつ！もうダメ！死にそう！」

バカ面が慌てて腕を押さえて転げまわる。そんなにバカ面をフルボッコにしたいのか。なんなら俺も混ぜてほしい。

「そんなことはどうでもいい。それより今から屋上でミーティングを行うぞ」

「雄二ー何なら俺もついて行っていいかー。ちょいと話したいことがあるんでな」

「ああいいぞ」

「……………（サスサス）」

自分の頬のあたりをさすりながら、バカ面のの前を歩く土屋。

「ムツツリーニ。覗いていた時の畳の跡ならもう消えているよ？」

「……………！！（ブンブン）」

「いや、今更否定されてもムツツリーニがHなのは知ってるし…

」

「……………！！（ブンブン）」

「さすが、ムツツリーニだね。ここまで否定するなんて」

「……………！！（ブンブン）」

「何色だった？」

「みずいろ」

即答かい。

「ムツツリー二つていろいろとすこいね」

「……………！！（ブンブン）」

「それにしても今日は風が強いね。ま、いいや。じゃあ屋上に行こうよ」

「……………急ぐぞ。早くしろ」

何て奴だ。屋上と風だけで食いつくとは……

んで。屋上。

「明久。宣戦布告はしてきたんだな？」

それは気になるな。三歩歩いたら1分前のこと忘れそうだし。

「もちろんしてきたよ。時間は確か……」

「まさか、忘れた訳じゃないだろうな（ボキボキッ）」

雄二が拳を鳴らしながら聞く。

「お、覚えてるよ。えーっと、そうだ。今日の午後に開戦予定って伝えてきたよ」

「午後か。ずいぶんとあいまいだな。まあいい。とりあえず先に、昼飯ってことだな」

「明久よ。今日ぐらいは、まともな昼食をとったほうがいいと思うのじゃが」

木下がもつともな事を聞く。何のことだ？

「そうね。今日ぐらいはアキもちやんと食事をとるべきね」

え？ こいつってまともに飯も食わないのか？

「え！？吉井君ってお昼を食べない人なんですか？」

「いや、……一応食べているよ」

「あれは食べているというのか？」

雄二の横やりが入る。

「何が言いたいのか」

「いや、お前の主食って 水と塩だろ？」

雄二の声に皆が賛同してバカ面を優しい目で見える。

ありえん。水と塩が飯だとは。

「だ、大丈夫だよ皆。ちゃんと砂糖も食べているから」

「あの、吉井君。水と塩と砂糖って食べるとはいいいませんよ」

「……………哀れ」

「バイトで暮らしてる俺でも毎日まともな弁当食ってるぞ？」

「ま、飯代まで使い込む明久が悪いよな」

「漫画とかゲームが毎月新作が出るのが悪いんだよ」

こいつそつとうバカだろ。俺はそんな娯楽に金を回したことなどほとんど無いぞ。

「あ、あのつ。良かったら私がお弁当を作ってくださいようか」

姫路の言葉に耳を疑った。

「良かったな。明久。手作り弁当だぞ」

「ほ、本当にいいの？」

「はい。もし、明久君が良かったらですけど」

「ふうん。瑞樹つてずいぶんと優しいんだね。アキだけに作ってるなんて」

島田、それを一般論では嫉妬と言っただぞ。

「あ、いえ！その、皆さんにも……」

「俺たちにもいいのか？」

「はい！嫌じゃなかったら」

「それなら俺のバイト代が少し浮く」

「それは楽しみじゃのう」

「……………（コクコク）」

「お手並み拝見ね」

これで姫路を含めて7人分も作らなければならなくなる。

「はい。じゃあ皆さんの分も作ってきますね」

なのに全く嫌な顔一つせず、そつ答える姫路。

「姫路さんって優しいね」

心からバカ面ははそう思っただろう。

「そ、そんな……」

「今だから言うけど、初めて会う前から姫路さんのことを好き……」  
「今振られたら弁当の話がなくなるぞ明久」

「……にしたいと思ってました」

……アホかバカ面は。いったい何を言っているんだ。

「明久よ。それでは欲望をカミングアウトした、ただの変態じゃぞ？」

「……………変態」

「最低だな。バカ面」

それにしても、変態<sup>つちや</sup>にまで変態と言われるとは。

「明久。お前はたまに俺の想像を超えた人間になる時があるな」

「だって、お弁当が……」

こいつはどういう金遣いをしてるんだろう。

「さて、話がかなりそれだな。試召戦争に帰ろう」

おお、そういえばそうだった。

「雄二ひとつ気になったんじゃがどうしてDクラスなんじゃ？ 段階を踏んでいくならEクラスじゃろうし、勝負に出るならAクラスじゃろう？」

それは、俺も気になっていたところだ。

「そういえばそうですね」

「まあな。当然考えがあつてのことだ」

雄二が何も考えないで戦争を仕掛けるとは思えないしな。

「どんな考えですか？」

「いろいろと理由はあるんだが、Eクラスを攻めない理由は簡単だ。戦うまでもない相手だからな」

「え？ でも僕らよりもクラスが上だよ」

当然俺らよりも点数が高くて、戦力も強いのに。

「明久。お前の周りにいるメンバーをってみろ」

「えーっと……美少女が2人とバカが2人とムツツリが1人に常識人が1人いるね」

「誰が美少女だと!？」

「……………(ポツ)」

「アキつたらもう、正直ね」

「ええっ!？君たちが美少女に反応するの!？」

「まあまあ、落ち着くんじゃ皆」

木下が皆をなだめる。

美少女って言ったら島田と姫路のことじゃないのか？

「ま、要するにだ」

コホン、と咳払いをして説明を始める。

「姫路に問題がないとしたらEクラスには勝てる。Aクラスが目標  
な以上Eクラスなんかと戦っても意味がないってことだ」

「ん？ それならDクラスとは、正面からぶつかるて厳しいの?」

「ああ、確実に勝てるとは、言えないな」

「ふうん。AクラスじゃなくてDクラスに仕掛けるってことは、な  
んか考えがあるんだね」

「明久なのに、分かっているじゃないか。初陣だからとか、さつき  
言いかけた打倒Aクラスの作戦に必要なプロセスだしな」

「僕だつて少しは、考えているんだよ」

「どうだかな」

雄二が少し笑いながらからかう。

「バカ面だからな」

「ねえその言い方何とかしてくれない!？」

「えー!。じゃあマヌケ面でいいか？」

「よくない!! せめて吉井とかにしてよ!!」

「あ、あの!!」

「ん? どうした姫路」

「えっと、そのさつき言いかけたつて……吉井君と坂本君は前から

試召戦争について話し合っていたんですか？」

「ああ、それか。それはついさっき姫路の為にって明久に相談されて・・・」

「それは、そうと！」

雄二のセリフを遮る様にバカ面がワザと大きな声を出す。

「さっきの話Dクラスに勝てなかったら意味がないよ」

「負ける訳ないさ」

雄二が笑いながら言う。

「いいか、お前ら。うちのクラスは 最強だ！！」

それは、不思議な感覚だった。

根拠なんか無い言葉なのにその気になってくる。

「いいわね！面白そうじゃない」

「そうじゃな。Aクラスの連中を引きずり落としてやるかの」

「……………（グッ）」

「が、頑張ります」

「かっかっか。任せたぜ將軍」

荒唐無稽な夢かもしれない。実現不可能な絵空事かもしれない。

でも、やってみねえと何も始まらない。

折角同じクラスになったんだ。何かを成し遂げてみるのも悪くないな。

「そうか。それじゃ、作戦を説明しよう」

涼しい風がそよぐ屋上で、僕は勝利の為の作戦に耳を傾けた。



## 第二話・俺とクラスと前準備（後書き）

「ついに試召戦争か。ちよつと燃えてきたな」

「そうじゃの。一生懸命がんばるぞい」

「ああそうだな。さあ次回予告だ」

「次回、『兄と学園とバカ騒ぎ・第三話・バカと戦争とDクラス』  
お楽しみに!!」

「木下って男なんだろ？　なんで女って言われてるんだ？」

「お主、わしのことを男として見ているのじゃな!？」

「いや普通はそうだろ」

### 第三話・バカと戦争とDクラス（前書き）

いい感じに書いてるような気がするww

### 第三話・バカと戦争とDクラス

「アキ！木下たちがDクラスの連中と渡り廊下で交戦状態に入ったわよ！」

ポニーテールを揺らしながら駆けてきたのは同じ部隊に配属された島田。こうして改めて見ると背は高く脚もきれいなのにどこか女性としての魅力に欠けるなあ。いったい何が足りないんだ。

「ああ、胸か」

「そう、アキ……。死ぬ覚悟ができたってことね？」

島田に対して『胸』は禁句のようだ。ご愁傷様だバカ面。

「そ、そんなことより試召換戦争に集中しないと」  
さて戦況はどうだろうか。

ちなみに俺は試験当日に居眠りしたため得点が無いので教室からでて高みの見物中だ。

「さあこい、この負け犬が」

「て、鉄人！？い、嫌だ。補修室には行きたくないんだ！！」

「黙れ！戦死した捕虜は補修室で特別授業だ」

「み、見逃してくれ。あんな、拷問に耐えられる気がしないんだ」

「拷問？違うな。あれは立派な教育だ。授業が終わるころには趣味が勉強で尊敬する人は二宮金次郎、といった理想的な生徒にしてやるわ」

「お、鬼だ。誰か、助けっ  
ン、ガシャン」

イヤアアあああ

（バタ

なるほど。これが戦争というものか。俺は少し甘く見ていたのかも  
しれない。

つてかあれは教育じゃない。ただの拷問だ。

「美波、中堅部隊の全員に通達！」

「ん？何か作戦でもあるの？」

「総員退避と」

「この意気地なし！」

その瞬間、目にチヨキが飛んでいった。

「目が。目があ！」

「目を覚ましなさい、このバカ。アンタは部隊長でしょ！臆病風に吹かれてどうするのよ」

おいおい。やりすぎだろ。せめて腹か顔にしろよ。

「いい、アキ？ウチらの役割は木下の前線部隊に援護でしょう？ウチらが逃げ出したらアイツらが補給できないじゃない」

「その通りだね美波。僕がまちがっ……」

「報告します前線部隊が後退を始めました」

バカ面が反省しているときに報告係がやってきた。

「総員退避よ」

おい島田。さつきと言っていることが全然違ぞ。

「アキ、総員退避で問題ないわね？」

「そうだね。僕らはよく頑張ったよね」

バカ面たちが逃げようと準備をしていると本来本陣にいるはずの男子生徒が駆けて行った。

「代表より伝令があります」

雄二から？いつたいなんだ。

「逃げたらクロス」

「全員突撃しろあ　っ！！」

ええ！？何でわかったんだ。まさか、超能力！？

「何をボーっとしてるのアキ！さっさと行くわよ」

「あっ。うん」

「明久。援護に来てくれたんじゃな」

「秀吉、大丈夫？」

「うむ、なんとかの。しかし点数はだいぶ削られてしまったわい」

「木下、それなら一度戻ってテストを受け直して来たほうがいいわよ」

「そうじゃな。全教科を受けている時間はなさそうじゃが、一・二教科ぐらいは受けてくるとしよう」

さて、ここからが本番だ。

「吉井隊長！横溝がやられた！これで布施先生側は残り5人だ」

「五十嵐先生側の通路だが残り3人しかいない。少し援軍が欲しい」

「まずい、藤堂の召喚獣がやられそうだ。助けてやってくれ！」

やはり、DクラスとFクラスの戦力差が徐々に始まったか。

「布施先生側の人達は、相手をそのまま引きつけておいて」

「五十嵐先生側の方は、総合科目の人と効率よく後退して戦死しないように」

「藤堂君は、守りに集中させて。二人ほど援護に回すから」

「了解！！」

皆がバカ面の指示に従って陣形を組み始める。一応隊長として扱っているみたいだ。

「アキ。この調子なら持ちこたえられそうね」

「うん！そうだね」

「くそつ。Fクラスの狙いは時間稼ぎか？」

「いったい何を考えているんだ」

さすがに少し感づかれてしまったらしい。

「吉井Dクラスは数学の木内を連れ出したようだ」

木内先生か。自分たちの得意なフィールドにして攻めてくるつもりだな。

そうなるとこのまま耐えるのは、少し難しいか。

「須川君！」

「なんだ？」

「偽情報を流してほしいんだ。時間を稼ぐために」

「偽情報？それは構わないがすぐにバレるんじゃないか？Dクラスで前線の指揮をとってる平賀は声が大きいから、うまく混乱してもすぐに収められてしまうぞ？」

確かにDクラスの平賀の声は大きな。

「大丈夫。対象はDクラスじゃないから」

「と言うと？」

「先生たちに流すんだよ。他の場所に向かってくれるように」

「……なるほど。確かに効果的だ」

とてもいい作戦じゃないか？いろんな意味で。

「流す偽情報の内容は、まかせてくれ。確実に騙してみせよう」

「うん。よろしく」

須川はそう告げると駆け足でこの場を離れて行った。こういうことが好きなのか？

ずいぶんと生き活きしているように見えたが。

「僕らは、一対一じゃ勝てないからね。戦死しないように互いをフォローをして……」

バ力面は指揮官として後方から指揮を出すか。まあ役割だからな。

「平賀、このままじゃ埒があかない！」

「もっ少し待っている！今、数学の船越先生も呼んでいる」

俺等にとつて好ましくない会話が聞こえてきた。今の状況にさらに数学の教師 船越先生（年齢45独身 性別 ）を呼ばれると正直言つてマズイ。

ピンポンパンポーン 連絡いたします

聞き覚えのある声が校内放送から聞こえてきた。

この声は須川か。職員室ではなく放送室に行くなんて流石だ。

船越先生、船越先生

しかも呼び出し相手は今話題に上がった船越先生。須川。ナイスだな。

吉井明久君が体育館裏で待っています

あはははははは！おもしろー！！

生徒と教師の垣根を越えた男と女の大事な話があるそうです  
相手はあの船越先生か。婚期を逃がしてついに生徒たちに単位を盾に交際を迫るようになった先生だ。

確かに確実に体育館裏に向かつてるしバカ面が来るまで何時間もその場を動かないな。

「アキ！？まさかあんた本気で……」

「ち、違つよ美波これは誤解で……」

「吉井隊長……アンタあ、男だよ」

「ああ。感動したよ。まさかクラスの為にそこまでやってくれるなんて」

前衛部隊の仲間たちが泣きながらバカ面に握手を求めてくる。

「くつ。あんな覚悟を決めた奴らに俺らは勝てるのか」

「さすがバカの代表Fクラス。恐るべしだな」

敵のDクラスでもこちらを畏敬の念で見つめてくる。

「皆、吉井隊長の死をむだにするな」

「おおー。絶対に勝つぞー」

どどんくクラスの士気に良い影響が。

「隊長。行けますよ！この調子で押し返しましょう」

「……………」

「……………隊長？」

「す……………」

「す？」

「須川ああああああああああっ！！」

バカ面が怒りで我を忘れた。

少ししてバカ面が自我を取り戻した頃。

「あれ？僕は今まで何を……………」

「明久、良くやった」

「あれ？雄二。僕は一体どうなっていたの？」

「何だ覚えていないのか？さっきまで須川の名前を大声で連呼してDクラスをなぎ倒していたじゃないか」

「ねえ雄二。須川君がどこにいるか知らない？さっきの放送の件でちよっ……………」と、お話があるんだよね」

「須川ならもうすぐ戻ってくるんじゃないのか」

そーいやあさつきバカ面が家庭科室から包丁をパクって靴下に砂を詰めるのを見たな。

「やれる。今の僕なら殺れる……………」

「……………殺るなつての……………」

俺と雄二のシンクロツツコミ。



「ちなみに、だが。あの放送を指示したのは俺だ」

「シャアアアー！！！」

俺も手伝ったんだがな。

「あ、船越先生来たぞ。バカ面」

確認もしないで逃げてったか。

「さて、バカは放つといてDクラスの代表の首級を取りにいくぞ」

「……………おうっ！！……………」

船越先生がいる以上バカ面も出ていく訳にはいかないかな。

「あー、明久。船越先生が来たっていうのは嘘だ」

バカ面がおそろおそろ教室内を覗いている。

「逃がすかああ！！ 雄二いいいい！！！！！」

だが気づくのが遅すぎだ。もう雄二はいない。

さて俺も一緒になって逃げてきたのだが、雄二はバカ面が追い付いてくる前にとつとケリをつける気だな。

「姫路、準備はいいか」

「坂本君、大丈夫ですよ。回復テストも受け終わりましたし、準備万端です！」

雄二の作戦は姫路にかかっているようだ。一応大丈夫だと思うが慎重に行かざるを得ないか。

「姫路。下校中の人混みに交じってDクラスの代表に勝負を仕掛けてくれ」

「はい！でもうまくいくでしょうか？」

「大丈夫だ。まず、姫路がFクラスに所属しているなんてDクラスは知らないだろう。だが、念には念を入れてAクラスの方から一人で歩いていってくれ」

これなら、姫路をAクラスと疑わないだろうな。

「わかりました。でも少し緊張しますね」

「はは、そうだな。少し緊張するかもしれないが頑張ってきてくれ」

確かに姫路はこの作戦の中心人物だからな。緊張しても仕方がないだろう。

「じゃあ俺は、本陣を連れて少しでも敵を多く引き付けるから後は頼んだぞ」

「はい。それで行ってきます」

さてと、俺は高みの見物といこうかな。

と言いたい所だが何か眠くなって来た。

やばいな……昼から授業なかったから寝てないんだ。

ん？いつのまにか寝ていたのか。まあ当然か。

『Dクラス代表 討死』

「「「「「うおおおおおおおおお！……！」「」「」「」

」

Fクラス内のいたる所から勝利の叫び声が聞こえてきた。

なんだ勝ったのか。よかった。

こうして今年初めての試召換戦争は幕を閉じた。

### 第三話・バカと戦争とDクラス（後書き）

「やっと終わったな。お疲れ雄二」

「ああみんながよくやってくれたからな」

「俺は最後寝てたけどな」

「そうなのか。さて次回予告だな」

「次回、『兄と学園とバカ騒ぎ：第四話・俺と妹とお買い物』お楽しみに！！」

「龍槻、お前には妹がいたのか」

「自己紹介のとき話したんだがな」

#### 第四話・俺と妹とお買い物（前書き）

今回は龍槻と夢華の買い物です。

#### 第四話・俺と妹とお買い物

休日それはバイトで生計を立てている俺にとっては滅多にない貴重なもの、いつもあまり寝ないからゆっくり寝るとというのが普通なんだろうが俺は違う。

休日だとしても6時半には起きて夢華のために朝食の準備や洗濯物干しなんかをしなければいけない。

さらに今日は夢華と買い物に行くことになっているから余計に寝てはいられないのだ。

「ん、もう7時か。さてお姫様でも起こしに行こうかな」

朝食の準備や洗濯物干しはもう終わったので夢華を起こしに寝室へ向かった。

今のところ俺と夢華の寝室は同じでいつも一緒に寝ている。これもあと何年続くことやら。

もう少し大きくなったら一人部屋を用意しないといけないな。

「おーい、夢華ー。朝だぞー起きろー」

「うにゅー。……すう……すう」

ちよつと起きてまた寝たのか。休日くらいゆっくりさせてやりたいがあんまり甘いと将来大変だからな。がんばって起こしてみるか。

「おーい。朝だぞー」

「すう……すう……」

全く起きないな……。はあしょうがない。30分後にまたお越しに来るか。

その間俺はテレビでも見てようか。

現在時刻7時30分。さてもう一回起こしに行くか。

「おーい、朝だぞー。そろそろ起きてくれー」

「うにゅー……ん？んーふわぁあ」

あ、今度はあつさり起きた。

「おはよう。夢華」

「おにいちゃんおはよ」

「ご飯出来てるから顔洗ってきな」

「うんゝわかった」

すっごい寝ぼけてるな。でもかわいかった。

さて俺は台所に行くか。

しばらくして夢華が来て朝食となった。

「いただきます」

今日の朝食は俺も夢華も白米、味噌汁、焼き魚の和食だ。

「で、今日は何時から買い物行くんだ？」

「うーんと、お昼ごはん食べてから行きたい」

「そうかそうか。じゃあ昼1時半から行こうか」

「うんっ！」

これで今日の予定が決まった。朝は家で過ごして昼からは買い物だ。にしても今日はゆっくり朝食が食べれるんだな。幸せだ。

そっうえば一ヶ月ほどで夢華の誕生日じゃないか。どうしようか雄二やバカ面とか呼ぼうかな。

まあそのほうがいいだろ、楽しいしな。

「夢華、あと一ヶ月ほどで夢華の誕生日だけど、兄ちゃん行ってる学校の友達呼んでいいか？」

「お友達？うんいいよ。多いほうが楽しいから」

今年は結構楽しくなりそうだな。その分食材が増えそうだが、財布のほうは大丈夫かな？

その後も喋りながらゆっくりと朝食を食べた。

朝食を食べ終わったあとは特にすることも無いので夢華と一緒にテレビを見たりトランプなんかをしていた。

そして昼食も食べ終わり、買い物へ行く為に出掛けた。

俺たちが来たのはバスで20分ほどのショッピングモールだ。  
ここで問題がでた。まず夢華の服を買いに行くか、食糧を買いに行くか。

あ、でもこの食料品売り場って夕方からタイムサービスやるんだよな。だったらそこを狙って買いに行くか。

よし決まった！ 夢華の服を買いに行こう。

「夢華、先に服を買いに行こっか」

「うんっ！ でも食べ物買いに行かなくていいの？」

「それなら夕方からちよつと安くなるからそこで買いに行くよ」

「そうなんだ。じゃあ早く行こっ！」

と言つてちよつと早足になる夢華。やっぱ女の子なんだな。

「お兄ちゃん！ 早くしないと置いて行くよー」

「はいはい。今行くよ」

でも場所分かつてるのかな？ すごく心配だ。

2階の子供服売り場に付いたが、今なら彼女持ちの男性の気持ちに分からんでもないかな。

「夢華、あんまりお金ないから2、3着しか買えないぞ？」

「分かってるよ。それよりこれ似合うかな？」

なんで小学2年生のはずなのにちよつと大人っぽく見えるんだ？  
全く分からんな。

「うーん。どれにしようかなー」

まあ嬉しそうに笑ってるからいいか。

「夢華、こつちもどうだ？」

「あ、これもかわいいなー」

「試着してきらいいんじゃないか？」

「そうだね。えっと……あつた！」

そうして試着室へと入っていった。  
お、近くにいいベンチが。座るか。  
数分して夢華が出てきた。

「お兄ちゃんこれとこれとこれにする！」

夢華が満面の笑みでほしいと言ったのは小さめの花柄がついた白いワンピースと白にピンクの柄のＴシャツ、半ズボン丈のジーパンだ。  
「よし、じゃあレジに行くか」

やっぱり妹の笑顔は心が癒される。だが俺はロリコンなどではないぞ。いたって普通だからな。

その後はタイムサービスまで特にする事がないためショッピングモール内をブラブラと歩いていた。

現在時刻３時１０分。小腹が空いてもいい時間だ。

タイムサービスまではまだ１時間ほどあるし少し休憩していこう。

「夢華、お腹空いてないか？」

「ちょっとだけ空いてるー」

「じゃああそこの店で休憩するか」

俺たちが入ったのは近くにあったフードコートだ。そこの店のひとつで夢華はアイスとオレンジジュースと頼んでして近くの席に座って休憩していた。

「ふー今日はちょっと疲れたな」

俺は無料の水を飲んでる。俺は水のほうが性に合う。

「でも楽しかったよ？」

「そうだな。また今度来ようか」

「うんっ！」

そこで１５分ほど休み食料品売りのタイムサービスで食材を買って帰った。



帰宅途中のバスの中で降りるバス停に付いたので夢華を呼ぼうとしたが、

「夢華、もうお家着くから降りる準備しないさ……寝てるのか」  
半日動き回って疲れたのか寝ていた。

「しょうがないなあ……よっと」

寝ているのを起こさないように夢華をおんぶしてバスを降り無事に家に着いた。

こうして俺と夢華の休日が終了した。

#### 第四話・俺と妹とお買い物（後書き）

「お兄ちゃん、今日は楽しかったね」

「そうだな。じゃあ今度はいつ行こうかな」

「今度の休みは？」

「それだとお金がすぐになくなるよ。そんなことより、次回予告しなきゃ」

「次回、『兄と学園とバカ騒ぎ：第五話・勝利と約束と不幸の手紙』お楽しみにー！！」

「お兄ちゃん。ちゃんと勉強してる？」

「いやバイトが忙しいし授業中は寝てます」

## 第五話・勝利と約束と不幸の手紙（前書き）

すみません。前回、次回予告のタイトル間違っていました。

## 第五話・勝利と約束と不幸の手紙

「Dクラス代表 討死」

「「「「「うおおおおおおおおお！！！」「」「」「」

Fクラス内のいたる所から勝利の叫び声が聞こえてきた。  
うるさい安眠妨害だ。ほかでやってくれマッハでフルボッコにするぞ。

「凄えよ！ 本当にDクラスに勝てるなんて！」

「これで畳や卓袱台ともおさらばだな！」

「ああ、あれはDクラスの連中のものになるからな」

「坂本雄二サマサマだな！」

「吉井もただのバカじゃないかったんだな」

「さすが、FFF団の幹部だな！」

代表である雄二を褒め称える声がいろんな所から聞こえてきた。  
あと、最後の奴どという意味だ。

「あー、まあ。なんだ。そう手放して褒められると、なんつか  
珍しく雄二が照れている。雄二でも照れることなんかあるんだな。

「坂本！ 握手してくれ！」

「俺も！」

こいつらがどれだけこの設備に不満を抱いてたかよくわかる。  
ん？バカ面も雄二ん所にいったのか。

「雄二！」

雄二がこちらに振り向く。

「僕も雄二と握手を！」

バカ面は笑顔で雄二に手を差し出す。

「ぬおおっ！」

ガシッ

「……………雄二どうして握手なのに手首を押さえるのかな？」

「押さえるにきまつているだろうが。……………フンッ！」

「ぐあっ！」

あ、手首を捻りあげた。

バカ面がたまらず握りこんでいた包丁を落とす。

「……………」

「雄二、皆で何かをやり遂げるって素晴らしいね」

「……………」

「雄二、あの、その……………くたばれえ！！」

バカ面が仕込んでいたスタンガンを雄二に突きつけようとした。

「明久。あまいな」

「ぐふう！」

雄二の拳が見事に鳩尾みぞおちに直撃した。

「お前が考えそうなことなど分からなければ、Fクラス代表は務まらないからな」

流石は雄二だな。

すると雄二はこっちに来ていたDクラス代表に向き直った。

「どうした。落ち込んだ様子で。安心しろ、Dクラスを奪う気はない」

「えっ！！ どうして！？」

Dクラス代表とバカ面の声が被る。

「忘れたのか？俺たちの目標はあくまでもAクラスのはずだろ」

打倒Aクラス。それはバカ面と雄二がいたる到達点。

「でもそれならなんで標的をAクラスにしないのさ。おかしいじゃないか」

「少しは自分で考えろ。そんなことだから近所の中学生に『馬鹿なお兄ちゃん』なんて愛称をつけられるんだ」

「な、何を言っているんだよ。そんなわけないじゃないか」

どうやら図星のようだ。本当にコイツは超能力者なのか？

「おっとすまない。近所の小学生だったか」

「……人違いです」

もう超能力者でいいだろ。

「まさか……本当に言われたことがあるのか……？」

分かってる。こいつ絶対に分かって言ってるぞ。

「とにかくだな。Dクラスの設定に手を出すつもりは一切ない」

「えっと、それでいいのか？俺達にはありがたいけど……」

「もちろん条件がある」

そりゃあそうだよな。このまま解放したら戦争をした意味がない。

「条件？ えっと、それは何？」

「なに。そんなに大したことじゃない俺が指示を出したら、窓の外にある、あれを動かなくしてもらいたい。それだけだ」

雄二が指したのはDクラスの窓の外に設置されているエアコンの室外機。

だがあれは、Dクラスのものではない。

「あのBクラスの室外機を？」

「設備を壊すんだから、当然教師に知らまれる可能性もあると思うがそう悪い取引じゃないだろ？」

悪い取引であるはずがない。うまく事故に見せかければ嚴重注意で済み、それだけで三カ月もあの教室で過ごす状態から逃れられるの

だが。

「うーん。設備を壊すのはちょっと……」

やはりか。Dクラス代表は真面目そうだからこういうことには乗ってこないか。

「その条件を受けますわ」

交渉失敗だなと思った時、どこからか声が聞こえてきた。

「し、清水さん!？」

バカ面が声をあげる。

「もしかして美波は、鉄人に……」

「私なら大丈夫よ。アキ!」

島田ががいつの間にか近くまで来ていた。

「あれ? どうして? 二人が戦っていたんならどっちかが負けて鉄人のえじきに……」

「折角美春が、お姉さまと本格的に愛を語ろうとしていたのに代表が負けるから……」

「ゴ、ゴメン」

Dクラスが清水と呼ばれた女子生徒に謝っていた。

「なるほど、だから二人とも戦死してないってわけか」

雄二が話に参加してくる。

つまり、まだ島田と清水が戦っていたが俺等の決着がついたから戦いは中止になったってことか。

「アキ! ありがとう。あともう少し遅かったらウチは……」

島田がブルブルと震えていた。

そんなに鉄人の補習が怖かったのか? それ以上に怖がっている気がするがあえて、聞かないでおくか。

「さて、それよりも交渉成立ってことでいいんだな清水?」

つと。そっぴやあその話をしていたんだった。

「ええ。豚どもの提案を受けいれるのは気に食わないですが、悪い提案ではないようなので」

「でも清水さん。やっぱり設備を壊すのはちょっと……」

Dクラスは納得いつてないようだ。

「代表は黙ってなさい！」

「ゴ、ゴメン」

Dクラス代表はあっさりと押さえこまれていた。

「さて、この話は終わりにするでしょう。清水！設備を壊すタイミングについては後日詳しく話す」

「分かりましたわ。ではお姉さまを置いてさっさと、豚小屋に帰ってくださいませ」

島田と話していた清水がこちらを向いてそう言い放った。

清水、豚小屋で確かにFクラスはボロいが。

「よし、じゃあ皆Fクラスに帰ろうよ。あっ美波は清水さんに用事があるみたいだから置いていこう」

「アキっ！？ここに置いていくつもり！？」

ある意味で酷いな。まあ日頃の行いのせいかな。

「お姉さまこの時間帯ならまだ保健室は開いてますわ」

その言葉を聞くと島田は一目散に逃げ出していた。

「アキっ！！絶対許さないんだから覚えときなさいよ」

「待ってくださいませ、お姉さま！」

二人揃ってどこかに行ってしまった。

「えっとじゃあ、帰ろうか」

「そ、そうだな」

雄二がなんとか答えていた。

「あ、あのっ、坂本君！」

「ん？」

皆の後を追って教室に向かおうとする雄二を呼び止める声。姫路か。

「お、姫路。どうした？」

「実は、坂本君に聞きたいことがあるんです」

少し興奮気味に話す姫路。大事な話みたいだ。俺達のは席をはずした方がいいな。

「おう、分かった」



雄二はそう答えると姫路と一緒に俺達から少し離れたところで話を始めた。

姫路を見ると結構熱心に雄二と話していた。

「・・・なら、もしかして・・・ってことですか？」

大変そうだな。こつちも。バカ面は手を振って落ち込んでるし。

「ま、もともと興味があつたが、きっかけはこいつがそんな相談をしてきたってコトだ」

俺がいろいろ考えているうちに二人が話しながらこつちにやってきた。

「あの、吉井君がそんなことを言い出した理由って・・・」

「さて。そういえば、振り分け試験で何かあつたみたいだが、それと関係あるかもしれないな。バカにはバカなりに譲れないものがあったってことだろ」

茶化すように笑顔で答える雄二。

お、雄二と姫路がいい感じだな。

「振り分け試験って　それじゃあ、やっぱり」

「俺の口から言ってよい範囲はこれが限界だと思うが　多分、姫路の想像は間違っていないと思うぞ」

なるほど雄二もまんざらじゃなさそうだな。

「さて明久、そろそろ帰るぞ」

「あ、うん。姫路さんとはもういいの？」

「ああ、これで決心も固まっただろうし、な？」

雄二が笑顔で姫路に問いかける。すると、姫路の顔が見る間に真っ赤になった。

おい。バカ面ーポケットから何を取り出してんだー

「そ、そうなんだ。良く分からないけどそれじゃあ、帰ろうか。姫路さん、またね」

「あ、はい！さようなら！」

顔を赤くしたまま手をぶんぶん振る姫路に見送られて、俺達は教室を後にした。

「じゃ、俺はバイトがあるから先に帰るな。また明日」

「おう。がんばれよ」

「じゃーねー」

俺は雄二達と別れ、走ってバイト先まで向かった。

### 【明久サイド】

「龍槻も忙しそうだな。妹のために連日バイトとは」

「毎日授業中寝てるみたいだし、かなり忙しそうだね」

「そうだな。だが試召戦争は手伝ってもらうぞ」

「それにしてもさ、Dクラスとの勝負って本当に必要だったの？別にエアコンぐらいならほかの方法でも壊せたと思うんだけど」

「ああ、そのことか」

帰り道に疑問に思っていたことを雄二に聞いてみる。

「理由は他にもある。クラスの皆を試召換戦争に慣らせるためだとか、自信をつけさせるためだとな」

「ふーん。いろいろと考えていたんだね」

とてもバカとは、思えない発言だ。神童再びって感じだな。

「Aクラスに勝てるかな？」

「無論だ。俺に任せておけ」

「……ありがとう。僕の我がままの為に」

「別にそんな訳じゃない。試召換戦争は、俺がこの学校に来た目的そのものだからな」

僕も、戦争に貢献する為に帰って勉強ぐらいはしようかな。

「あつ！教科書を卓袱台の下に置いたままだった」

「……あほ。さっさと取ってこい」

「うう。……先に帰っていいよ！」

「当たり前だ！さっさと帰らせてもらう」

分かってたけど、この薄情者がっ！

僕はしぶしぶ、学校に帰って行った。

「たっだいま〜」

Fクラスは家のような感覚なので間違っではないだろう。

「よ、吉井君!？」

「姫路さん何をしているの？」

「なんかちよつと恥ずかしいな。」

「どどどどうしたんですか？」

姫路さんの手元には、まるで雄二へのラブレターに使うような便箋と雄二へのラブレターに使うような封筒を用意しているみただけど、使い道が分からない。

本当に分からないっ!!

「えっと、あ、あのこれはその……」

「うん。わかっている大丈夫だよ」

「あっ! きゃあ!」

卓袱台につまづいて転ぶ姫路さん。

その拍子に隠そうとしていた手紙が飛んできて、その一文が目に入る。

あなとのことが好きです

……ま、まさかね。これはラブレターなんかじゃない。これは……

「変わった不幸の手紙だね」

雄二に渡すとしたらコレしかない!!」

「あ、あの、それはそれで凄く困る勘違いなんですけど……」

「大丈夫だよ、姫路さん。そんな手紙なんか書かなくても僕が直接手を下してあげるから。じゃあ、明日ぐらいにムツツリー二にスタンガン借りて……」

「吉井君。これは不幸の手紙なんかじゃないですから」

「嘘だ! それは不幸の手紙だ! 実際に今僕が不幸な気持ちになっっているじゃないか!」

「吉井君」

僕が駄々をこねていると、姫路さんが優しく声をかけてきた。

「落ち着いてください。そんなに暴れると、どこかにぶつけてケガをしちゃいますよ」

雄二はこんなに優しい姫路さんに、好かれているのか。

完敗だ。

……仕方がない。現実を認めよう。

「その手紙相手はウチのクラスの……」

「……はい。クラスメイトです」

顔を真っ赤にしながら答える姫路さん。

……これで、相手は雄二に確定だな。

「そっか。でも、そいつのどこがいいの？見た目はそれなりだと思うけど……」

「あ、いえ。外見じゃなくて。も、もちろん外見も好きですけど……」

……

「憎いつ！あの男が心底、憎い！！」

「……そうなんですか？」

姫路さんはよく意味が分からないといった具合でこちらを見てきた。

「うん。外見に自身がない僕にはうらやましくて」

「え？どうしてですか？とつてもかつこいいですよ。私の友達も興味があるって言ってましたし！」

「外見もつてことは中身もいいの？」

「えーっと……はい」

「そうだね。臓器とか高く売れそうだよね」

「それは、体の中身です」

「ま、まさかありえないとは思うけど、そいつの性格がいいの？」

「ありえなくありませんっ！！」

姫路さんが大きな声で答えてきた。

そこまで雄二のことを……

「一応聞くけどそいつの性格のどこがいいの？」

「や、優しい所が……」

そりゃあ、姫路さんには優しいかもしれないけど、いつも僕に対する仕打ちを見ても優しいと？

「今から電話番号を言うからメモってね。大丈夫。腕のいい脳外科医だから」

「別に気が変になった訳でもありません」

だってあの性格を優しいと思うなんていったいどんな環境で姫路さんは育ってきたんだ！？

「優しくて、明るくて、いつも楽しそうで……私の憧れなんです」

姫路さんが真剣な表情で言う。

とてもじゃないが、茶化す雰囲気じゃないな。

「その手紙」

「は、はい」

「良い返事がもらえるといいね」

雄二は憎いけど……

姫路さんがそこまで真剣なら僕は、姫路さんを応援しようと思った。

「はいっ！」

本当にうれしそうに笑う姫路さんは本当に魅力的で僕は心の底から雄二が羨ましいと思った。

## 第五話・勝利と約束と不幸の手紙（後書き）

「無事勝てたし次はどことやるんだ？ 土屋」

「……………次はBクラス」

「そうかありがとな。そっぴゃあ俺ってまだ無得点じゃなかったか？ さっさとテスト受けないとまずいよなあ」

「……………早く自己紹介するぞ」

「「次回、『兄と学園とバカ騒ぎ：第六話・俺と点数と召喚獣』お楽しみに！！」」

「なんで土屋って『ムツツリーニ』と呼ばれてるんだ？」

「……………それは『寡黙なる性識者』からきている」

## 第六話・俺と点数と召喚獣

翌朝、いつも通りに学校に向かう。

今日、みんなは試召戦争で消費した点数補給の為に、俺は自分の点数確保の為にテスト漬けた。

頑張らねえとなあ。

「うーす」

教室の戸を開ける。

やっぱりDクラスとチェンジした方がいいんじゃないか？

「おう龍槐。」

「ん。雄二か。昨日のバイトが長引いてな。5分延長して寝てたんだ」

テスト前に勉強をしてる雄二に挨拶した。

俺も勉強しないとな。

「おはよー」

「おう明久。時間ギリギリだな」

バカ面がさっきの俺と同じようなことを言っただけ。あれ？

昨日もこんなこと無かったか？

「ん。おはよう雄二」

「そついえば、お前いいのか？」

「何のこと？」

「昨日の後始末だ」

ああ、雄二を殺すことが。

「今やっても、きっと返りうちにあつかうらいよ。今度もっと油断しているときに……」

「いや、そのことじゃないんだが……ってまだお前諦めていなかったのか！」

「当たり前じゃないか！ 僕はそんな簡単にあきらめる人間じゃないよ！」

「……セリフだけならまともなんだが。まあいい。（返りうちにしてやるからな）後始末とは島田のことだ」

島田？ ああ、あれの事か。

「アキっ！」

「ごぶあつ！」

「し、島田さん。朝から飛び蹴りはちょっと……」

「黙りなさい！ あの後、美春から逃げ切るのにどれだけ苦労したと思ってるのっ！？」

やはりそのことだった。

「あ、あれは清水さんが島田さんに用事がありそうだったから置いていった訳で……」

「そんな理由で置いて行っただっていつの？ ……と、本来掴みかかってる所だけど」

島田が急に冷静さを取り戻していく。

「アンタにはもう十分罰が与えられているようだし、許してあげる」

「うん。さっきから背中がズキズキと痛いんだ」

「いや、そうじゃなくて……」

「ん？それじゃあ何？」

他にも何かあるのだろうか。

「一時間目の数学のテストだけだ」

島田が楽しそうに。本当に心から愉<sup>たの</sup>しそうに告げる。

「監督の先生は船越先生だって」

バカ面はそれを聞いた瞬間、戸を開けて廊下を全力疾走した。

「うあー……づかれたー」

バカ面が机に突っ伏す。

とりあえず、四教科が終了。結果はまあまあかな。

「うむ。疲れたのう」

「それよりもお腹がすいたね。お昼を食べに行かない？」



「よし、昼飯食いに行くぞ！今日はラーメンとカツ丼とチャーハンとカレーにすつかな」

雄二も昼食を食べに行くらしい。大食漢だなこいつは。

「ん？ 吉井達は、食堂に行くの？ だったら一緒にいい？」

「ああ、島田が別にかまわないぞ」

「それじゃあ、混ぜてもらうわね」

島田も来るのか。大人数だと楽しそうだな。

「吉井！ なんかウチの悪口を考えてない？」

「いいえっ！ 滅相もございません」

あれは絶対考えてたな。

「さて、僕は何を食べようかな？」

「俺は昨日の夕食の残りがあるからな。あんまり金もかけたくないし」

「明久。少しは龍槻を見習ったらどうだ？」

「あ、あの。皆さん」

立ち上がり食堂に行こうとしていたら急に声をかけられた。

「ん？ 姫路さんも一緒に食堂に行く？」

「あ、いえ。お、お昼なんですけど、その、昨日の約束の……」

昨日の約束？ あああれか。

「おお、もしかして弁当かの？」

「は、はい。迷惑じゃなかったらどうぞ」

木下も同じことを考えてみたいだな。

「全然迷惑なんかじゃないよ。そうだよね雄二？」

「ああ、そうだな。ありがたいな」

珍しく雄二が嬉しそうな顔をする。

姫路の料理か。お手並みを拝見させて貰うかな。

「そうですか？ 良かったあ」

嬉しそうに笑う姫路。

「では、折角のご馳走じゃし、こんな教室ではなく屋上に行くかう」

「そうだな」

姫路が作ってくれた弁当をFクラスで食べるなんてもったいな。屋上という案には賛成だ。

「そうか、それならお前らは、先に行つててくれ」

「あれ？ 雄二はどこかに行くの？」

「飲み物でも買つてくる。昨日頑張ってくれた礼も兼ねてな」

「あ、それならウチも行く！ 一人じゃ持ち切れないでしょ？」

島田が気遣いを見せるなんて珍しいな。

「アキ。飲み物はBLACKのホットでいいわね？」

なるほど、そういうことが。

「島田さん。今は春だよ？それに僕がBLACK飲めないって知っているじゃないか」

暖かい日差しなのに屋上で何を飲ませようとしているんだ。でも面白そうだな。

「冗談よ。じゃあ坂本、はやく行きましょう。吉井は、おでんがいらしいから……」

「ああ、そうだな。冷めないようにはやく、持って行ってやらないとな」

「二人とも待つて！！ 僕はおでんがいいなんて言つてないよ！？」

「俺の分は必要ないからな」

しかし、二人の姿はなくもう買いに行つたみたいだ。俺の分まで買つてきそうだな。

というか、この学校の自販にはおでんがあるのか。

「……………明久。屋上に行くぞ」

「早くしないとお前だけ姫路の弁当抜きだぞ。バカ面」

「それひどくない！？」

さて屋上に行くか。

【坂本サイド】

「二人とも待つて！！僕はおでんがいいなんて言つてないよ!？」

「俺の分は必要ないからな」

明久のバカが。俺がお前に普通におこる訳がないだろ。

それにしても……

「珍しいな、島田。手伝ってくれるなんて」

「何？　ウチが手伝つてたら変だつていうの？」

少し気分を害してしまったな。

「いや、別に変という訳じゃない。ただ、普段なら明久達と屋上に行つていと思つてな」

「だつて、瑞希が頑張つてるから、ウチだつて、その……」

まあ、大方そんなことだろうと思つたが。

「気がきくライバルがいて大変だな？」

「なっ！　ちよつと、からかわないでよ！」

島田の顔が少し赤くなつた。

本当のことを言つただけなんだがな。

「島田も、もう少し積極的になつたらどうだ？」

「な、何よ。坂本には関係ないじゃない」

明久の幸せを潰すのが友達としての役目だからな。

実際には関係があるんだが黙つておこつ。

「確かに関係はないが、クラスメイトとして、恋の行方には興味が  
あるからな」

「べ、別にウチは吉井のことなんて好きじゃ……」

相変わらず島田は不器用だな。

「大丈夫だ。俺はお前の味方だ。何か手伝えることはないか？　遠慮  
なく言つてくれ」

面白い方向に誘導はするがな。

「そう、でも大丈夫よ。手助けはいらないわ。これはウチ自身の問  
題だから」

「そうか、うまく（面白く）いくように応援でもさせてもらつか」  
もちろん、アイツの幸せは望んでいないが。

「ありがとう。じゃあ、早く買って戻りましょう。ちょっと遅くなっちゃったし」

「くく、そうだな。早く明久の所に戻るとするか」  
本当に不器用だな。

「ちよつと、なんでそこで吉井が……」

「だが……って意味じゃ……」

俺は、島田をからかいながらも、屋上に向かって歩き始めた。

「ふう〜。やっと到着か」

屋上へと続くドアを開けるとさわやかな空が広がっていた。

視界の端に不穏な空気のグループが映ったが。

「あ、皆もう食べ始めているわね。ウチたちも早く混ざりましょう」  
島田にせかされたので仕方なく、そのグループに向かっていく。

「悪いな、遅くなったな」

「あ、大丈夫ですよ。今食べ始めたばかりですし」

姫路が笑顔で答える。

まだ、お弁当はほとんど手つかずの状態が残っていた。

よくよく考えればこのあたりで、何かおかしいことに気づくべきだった。

「そうか。ん？明久。ムツツリー二は体調でも悪いのか？女子がいるのに、日陰にいるなんて」

ムツツリー二は、ここから少し離れた日陰で横になっていた。

「あ、うん。……そんなことより雄二も姫路さんのお弁当を食べたら？」

「そ、そうだな。雄二、食べてみろよ」

「それもそうだな。どれ、頂くとしよう」

ムツツリー二のことだ。どうせ、姫路関連で鼻血でも出し過ぎたんだろう。

俺はそう思って姫路のうまそうな弁当に手を出した。

（明久、お主というやつは……）

（大丈夫だよ秀吉、雄二だから。それにちゃんと確認しておきたいしね）

（俺は絶対にこれを食べないからな）

何か小声で話しているみたいだが、まあわざわざ突っ込むことないだろう。

ふっ。特に明久は、これから面白いことになりそうだからな。

この時の俺はどうかしていたとしか思えない。

「（ぱくつ）さすがだな姫路。なかなか、おいし……（バタッ）」

「坂本君！だ、大丈夫ですか？」

「……………」

そして今現在、生死の挟間をさまよっている。

（雄二、おいしかったよね？）

明久のバカが小声で声をかけてくる。

本来なら明久の期待を裏切りたいところだが、さすがに何も悪くない姫路まで傷つけることはしない。

「ああ。だ、大丈夫だ。弁当うまかったぞ」

必死に意識を保ちながら何とかこたえる。

「坂本、突然倒れるなんてどうしたの？」

島田がもつともなことを聞いてくる。

「島田さん、雄二はきつと足がつったんだよ」

「ああ、最近体を動かすすぎたとか言ってたからな。ちょっとしたら立ち直るだろう」

明久と龍槐のフォローが入る。

「でも、坂本ってこれ以上ないって位鍛えられていると思うんだけど」

もうちょっと、マシなフォローはなかったのか！ 龍槻も！

俺はお前と違って鍛えてあるから足をつるなんてことはめったにない。

「違うよ。雄二は無駄な筋肉がないから、筋が張りやすくなってつるんだよ。島田さんも胸がよくつるから、わかるように足のつま先にはげしい痛みがあああああ！」

途中までは良かったんだが最後に余計なことをいうとは、本当に明久だな。

（明久、龍槻、テメエら知っていて姫路の弁当を勧めやがったな？）

（な、なんのことかな？）

（俺は食べてみると言っただけだが）

（ふざけんな！ ムツツリー二がどうしてああなったか知っていただろう）

ムツツリーには日陰でブルブル震えながら横になっていた。

（雄二なら大丈夫だと思ってさ。実際にムツツリー二よりも被害は少ないみたいだし）

（そういわれればそうだな。まあ雄二なら大丈夫だろ）

（じゃあ、今度はお前らが逝け）

（雄二？ なんか漢字が違うような……）

（それは、お前がバカだからそう思うだけだ。とっとと逝って来い）

（俺もかよっ！？ 俺はこんな事で妹と二度と会えなくなるのは嫌だぞっ！？）

（いやでも、やっぱり遠慮したいなーって……）

（貴様らに拒否権はない。俺が貴様の胃袋の中に詰め込んでやる）

（（ぎゃあー！ 鬼っ！ 悪魔……！））

当然だ。明久と龍槻も一度死の淵を見てくるべきだろう。

（ワシがいこう！）

今まで会話に参加していなかった秀吉が唐突に言ってきた。

（秀吉！？ 無茶だよ雄二ならまだしも……）

（おい、明久どういう意味だ）

（ワシの胃袋はかなりの強度を誇る、だから大丈夫じゃろう。それに……）

（それに？）

（ワシもこのクラスの仲間じゃからな。無茶な行為には慣れておる）  
秀吉がやけに、仲間の部分を強調して言う

（秀吉……もしかして……）

明久が何かを感じ取ったようだ。

（秀吉、やっぱり危険だよ。ここは雄二に……）

明久が再び秀吉を説得しようとしているが、

「吉井達！ さっきから何をボソボソとしゃべっているの？ はやく皆で食べましょう」

島田が秀吉への説得をさえぎった。もちろん当本人にそんなつもりはないだろうが。

島田のことをすっかり忘れていたな。また邪魔される前にここから退場させた方がいいな。

「島田さん、そういえばさっき、その手についているあたりに虫の死骸があつたよ」

「きゃっ。もう、はやく言ってよ。ちょっとウチ、手を洗ってくるわ」

「うん、そうした方がいいよ。食べる前はちゃんと手を洗わないとね」

明久にしては良くやったじゃないか。

さて、次は秀吉の説得だな。

（明久、雄二よ。わしはもう覚悟を決めたぞ。あれを見事に全て食して見せよう）

（秀吉ダメだよ。ダークマタ は、口入れるものじゃ……）

（そうだ木下、お前のような心優しい男子がいなくなったらどうするんだ！）

しかし、秀吉はもう行動に移ってた。

「む？姫路よ。あれはいつたいなんじゃ？」

姫路は疑うことなく指さされた方角を見る。

そしてその隙に、

「わしは……負けん……ぞ」

意識がとぎれとぎれになりながらも、秀吉は姫路のダークマター（自作）を口運んでいた。

「なにもないようですけど……」

「す、すまぬ……わしの……見間違ひ……じゃっ……た」

秀吉は命をすり減らしながらもすべて完食していた。

（秀吉、見た目は女の子だけど中身は漢おとこだね）

（バカ面、木下外見も男だろ？）

（ああ、男の中の漢おとこだ）

（そ、そつい言ってもらえば……悔いはない）

「パタッ」

「木下君食べてからすぐ寝ると牛になっちゃいますよ。それにしてもいつの間にか全部キレイに食べてありますね」

姫路は相変わらずのんきなことを言っていた。

……秀吉。恩にきる。

「う、うんおいしかったよ。姫路さん」

「ああ、なかなかやるじゃないか」

本当にいつか殺りかねないけどな。

「そう言ってもらえて嬉しいです」

姫路は素直に喜んでいた。

「そつえばおいしいと言えば、駅前においしいピザ屋ができたんだって」

また、作ってきます。とか言われると困るからな。俺もその話に乗るとしよう。

「ああ、知っているぞ。確かヤクトピザだったかな？うまくトッピングの相性が合えば、うまいらしいが失敗するとトンデモなくマズイらしいぞ？」



「俺もその話をバイト先の後輩から教えてもらっただけ」

「そ、そんなお店があるんですか。ちょっと怖いですね」

「まあ、おいしいものを食べるにもリスクが必要ってことだな」

「今回はおいしそうなものでも、リスクがあると学んだけどな」

「あつ！そういうえば私、デザートも作ってきたんだ」

姫路はそういうとヨーグ　トのような白い半固形物が入ったタッパ　ーを取り出した。

（さて明久、龍槻。まだ姫路の自作ダークマターを食べていないのは、お前らしいないぞ）

（で、でも雄二。あれは無理だよ。ヨー　ルトみたいだけど、泡立　ってるからね？　なんで炭酸みたいに泡が出るの？）

（知らんっ！　一つ言えるのはあれが姫路の実力ということだ）

（あんなの料理じゃないぞ！？　ただの兵器だろっ！？）

（無理だよ。食事回数が少なくて退化して言っている胃にあんなものはいれたら……）

（明久、龍槻。悲しいが来世でまた会おう）

（雄二！？　だったらやめてよ。僕はまだ死にたくない！）

（そうだ！！　ここは他の方法を考えろ！！）

「えっと、どうしたんですか？　あつ！スイマセン。箸じゃあ食べにくいですよね。スプーンをとってきます」

（今の内だ明久、龍槻。一気にいけ。今しかチャンスはないぞ？）

（いやだよ。それにそんなチャンスはいらないよ）

（ああいらんな！　ってか他の方法は無いのかっ！？）

（それなら、俺が無理やり飲ませてやる。ありがたく飲め）

（ち、近づいてくるな。ヨーグル　？　をもって近づいてくるな）

（やめろ。それだけは勘弁してくれ）

俺が明久達に無理やり飲まそうとしてタッパ　ーのふたを開けた瞬間

ジュウウウウ

「ゆ、雄二タツパーが溶けているよ」

「な、なんだと！」

空気に触れた瞬間に酸化したということか。

さすがに、これは……

「明久、龍槻。その、むりやり飲ませようとして悪かったな」

今も音を出しながらコンクリートを溶かしている　ーグルト？を見ながらいう。

「うん。大丈夫だからいいよ。アレは、体にかかったただけでも大ダメージを受けそうだね」

「そうだな。姫路はいつたい何者なんだ……」

そんなものを口の中に入れられていたらまず間違いない……

いつの間にか復活していたムツッリー二と瀕死状態の秀吉も加わって、四人でヨー　ルト？が全て蒸発していくまで眺めていた。

## 第六話・俺と点数と召喚獣（後書き）

「雄二、あれないだろあれは……」

「そうだな。次から気を付けないとな」

「まあ次回予告するか」

「次回、『兄と学園とバカ騒ぎ・第七話・仲間とテストとBクラス』お楽しみに!!」

「そういえば龍槻はどれぐらいの点数が取れるんだ？」

「そうだな…… Bクラスの代表を取れる位だったかな」

「以外に勉強できるんだな」

## 第七話・仲間とテストとBクラス（前書き）

5000アクセス突破しました。ありがとうございます。

## 第七話・仲間とテストとBクラス

「そういえば雄二、次の目標だけど」

「ん？ 試召喚戦争のか？」

「うん」

すさまじい昼食を終え、復活した皆でお茶をすす。得に木下には大量のお茶を飲ませる。お茶には殺菌成分が含まれているらしいから。ちなみに島田はお茶だけしか飲んでいない。本人は憤慨ふんがいしていたけど俺等としては感謝してもらいたいくらいだ。

「相手はBクラスなの？」

「ああ、そうだ」

Bクラスの室外機を壊すぐらいだから、狙いは当然Bクラスだろうな。

「なんでBクラスなの？ 目標はAクラスじゃないの？」

俺等の目標はAクラスだ。まあ雄二にはなにか策があるんだろう。

「正直に言って俺らの戦力じゃAクラスには勝てない」

「じゃあ、最終目標はBクラスに変更ってこと？」

「いいや、そんなことはない。Aクラスをやる」

「雄二、さっきと言っていることが違うじゃないか」

「確かにAクラスとまともにやりあっても勝てない。だからAクラス戦は一騎打ちに持ち込むつもりだ」

「なるほど、それなら勝率も上がりそうだな。こっちには一点特化型の生徒が多い。それをうまく使うってことだな」

「そういうことだ」

確かにそれなら勝てるかもしれない。

「でも、どうやって？ 僕らに有利な条件を向こうが受け入れるとは思えないけど」

「確かに、その通りだ。だが、そこでBクラスを狙う意味が出てくる」

「……………」

「まあ、明久じゃ理解でないだろうから言わないがな」

「そうだな。バカ面だからな」

「とりあえず、Aクラスの前にBクラスを狙うってことだね？」

「まあ、そういうことだ」

「次はBクラスね。Dクラスでも苦戦気味だったのにウチ達は勝てるの？」

「島田、何を言っている。勝てない勝負を挑むほどバカなのは明久ぐらいだ」

「なんで！？　いくら僕でもそんなにバカじゃないよ！」

「はははっ。こいつらなら本当にやってくれるかも知れんな。」

「それにだ、俺を誰だと思っている。作戦は、準備済みだ！」

エアコンの件と関係あるのだろう。雄二は自信たっぷりの笑顔を見せた。

「さて、明久、今から、Bクラスに宣戦布告に行つて来い」

「い・や・だ」

「やれやれ。それなら、ジャンケンで決めないか？」

「ジャンケン？」

ん？　何かがおかしいぞ。

「OK。乗った」

「よし。負けた方が行く、で良いな？」

バカ面は、コクリと頷く。

「ただのジャンケンじゃつまらないし、心理戦ありでいこう」

心理戦か。面白いけど、雄二はこっぴどく強そうだな。

「わかった。それなら僕はグーを出すよ」

「そうか、それなら俺はお前がグーを出さなかったらブチ殺す」  
そうくるか。

「行くぞ、ジャンケン」

「わああっ！」

パー（雄二）

チヨキ（僕）

「……明久。いい覚悟しているじゃねえか！」

「ち、違うんだ。これは本能的に出したらこうなって……」

「言い訳はいい。歯をくいしばれっ！」

「ぎゃああー！！ 助けてー！！」

バ力面が雄二から逃げようとしたとき……

「……というつもりだったか？」

「へっ？」

「俺が親友である明久を殴る訳がないだろう。勝負は勝負だ！俺が負けたのだから、俺がBクラスに宣戦布告しに行くでしょう」

「……？」

「雄二、どうかしたのか？ どつかで頭でも打ったのか？」

いつもの雄二じゃ、絶対に言わない事を言った。

俺の聞き間違いかと思って周りを見渡すと、雄二のことをよく知るバ力面と土屋と木下も同じように不思議そうな顔をしていた。

「えっと、雄二？ 僕がBクラスに行こうか？」

「何を言っているんだ明久。勝負は俺の負けじゃないか。だから、お前はここにいろ」

どうやら聞き間違いじゃなかったようだ。

「それじゃあ、行って来る。宣戦布告は、はやい方がいいからな」

「はい。じゃあ、坂本君。気を付けて行ってきてください」

「ああ、ありがとう姫路。そうだ、ちょっと話があるんだが、今からいいか？」

「えっ？ あっはい！ 別にかまわないですけど」

雄二は姫路を連れて僕らから離れていく。

【雄二サイド】

さてと、あいつらに聞こえないぐらいの所まではきたな。

「姫路。話つてのはさっきの弁当のことなんだが……」

「さっきのお弁当ですか？」

「ああ。さっき姫路は見てなかったかもしれないが、実は俺たちはあまり、弁当を食べれなかったんだ」

「えっ！？ どうしてですか？」

「ある奴がすごい勢いで食べて、俺たちの分もほとんど食べていたからな」

「えっと、いったい誰ですか？」

「明久だ！ 明久の奴よどうれしかったんだな、姫路の弁当が食べれて」

俺が素直に負けを認める訳がないだろう。明久のバカめ。

「よ、吉井君が？」

「ああ、何もなかったような顔をしているのは、照れくさいからで本当はまた、食べたいと思ってると思う」

死よりも苦しい地獄というものを味あわせてやる。

「そ、そうなんですか」

姫路が照れくさそうに笑いながら言う。

「だからまた今度、明久に弁当を作ってきてやってくれないか？ 明久が喜ぶと思うから」

「分かりました。じゃあ、一緒に皆さんの分も……」

「いや、俺たちの分はいい。皆の前だと明久も素直になれないと思うからアイツの分だけを作ってきてくれればいい」

地獄を体験してくるのは明久だけで十分だ。

「そうですか。吉井君がそんな……」

「ああ、とても喜んでいたぞ。だから、腕によりをかけて作ってきてやってくれ」

致死率がUPすると思うから。

「はい！ 分かりました。それにしても、坂本君って友達思いなん



ですね」

「ん？ いや、そうでもないさ」

実際には地獄に追い込もうとしているからな。

「謙遜しなくてもいいですよ。あつ！ そろそろ私戻りますね」

「悪かったな。付き合わせてしまつて」

「いいえ。むしろ、吉井君のことを教えてくれてありがとうございます」

律義に姫路は、頭を下げてお礼を言ってきた。

「いや、礼には及ばないさ。頑張つて作つてやつてくれ」

「はい！ 私、頑張ります」

そういつて姫路は去つて行つた。

さて、俺もBクラスに仕事をしに行くか

### 【龍槻サイド】

「それにしても、雄二が姫路さんに話つていったいなんだろうね」

「むう。Bクラス戦についてではないかのう？」

「……………それだったら、ここで話した方がいい」

「そうだよなあ。まあ雄二のどこだ。何か策でもあるんだろ」

「うん。あまり情報が漏れないようにしているんじゃない？」

島田が妥当な答えをいう。

「む？ 本人が帰つてきたようじゃ。気になるなら、本人にきけばよからう？」

「それもそうだね」

確かにこのままじゃ気になるからな。

「姫路さんお帰り」

「あつ！ 吉井君。た、ただいまです」

姫路は顔を少し赤らめてうつむきながら言つた。

「ちよつと聞きたいんだけど、さっき雄二と何をしゃべっていたの？」

「さ、坂本君とですか？えっと何というか、その……」

「その？」

「……秘密です」

姫路に凄い笑顔で言った。

「それよりも早く教室に戻って回復試験を受けませんか？ 明日は、

Bクラス戦ですし」

「そ、そうだね」

俺、まだ点数無いんだった。

回復試験ってことなら雄二も……よくよく考えたらアイツは召喚すらしていないから回復試験を受ける必要がないのか。

俺等は、まだ残っている回復試験を受ける為にFクラスに戻った。

### 【雄二サイド】

さて、ここがクラスか。Aクラスと比べると見劣りするがなかなか立派だな。

明久達が目標をBクラスに変えたのかと聞いてくる理由もわかるな。だが、俺の目標はあくまでAクラス。

アイツに世の中は、学力だけじゃないと教えてやるために……つと、今はBクラスに集中しないと。

「失礼するぞ！ Fクラス代表の坂本雄二だ。Bクラス代表に話があつて来た」

周りの生徒がざわめきはじめる。当然か。Dクラスを破ったFクラスがBクラスの代表に話があるって言ったら大体察しがつくからな。「それで坂本。この俺に何の用だ？」

「とぼけんなよ！わかってんだろ？それとも、Bクラスの代表様はそれも分らない位オツムが悪いのか？」

正直コイツは去年から目ざわりだったからな。

「当然分かって言ってるに決まってるんだろ！最弱のFクラスが無謀にもBクラスに宣戦布告しに来たんだろ？」

「最弱ねえ。その最弱に倒されるクズの代表はお前だろ？」

「てめえ！FクラスごときがBクラスに勝てる訳がねえだろ！」

「勝負はやってみなくちゃ分からないってな！」

「いい加減にしろっ！Dクラスにはマグレで勝てたみたいけどな、俺たちはDクラスとは違うんだよ！」

確かにDクラスはもつと、代表が信頼されていたから、そうかもしれないな。

「じゃあ、やってみようじゃないか？」

『ここに、Fクラス代表 坂本雄二がBクラス代表 根本恭二に宣戦布告をする！』

「上等だ、受けてやる！BとFの実力の違いを見せてやる」

俺は、クズ（根本）の叫び声を背に、とある場所に向かって歩き出した。

【明久サイド】

「雄二、遅いねえ」

「確かにちよつと遅いですね」

俺達は回復テストを受け終わって、下校時間だ。

皆が雄二の事を少し心配して、Fクラスに残っていた。

「何か、あつたのじゃろうか？」

「……………少し、心配」

「そつだな。なにかあつたのか？」

さっきの雄二が普段と違っていたので余計に心配しているんだろう。

「あつ！雄二からメールが来た！まだ、ちよつと用事があるから先に帰っていてくれ。だつて」

「何もなかったようで良かったです」

「まあ、そつじやの。さて、ではワシらも帰るとするかのか？」

「そうね。明日もテストを受けないといけないんだし、早く帰りましょう」

「……………（コクコク）」

「俺は今日もバイトだけだな」

俺も今日はテストばかりで疲れたから、はやく帰りたいな。

「あの、皆さんは先に帰っていてください。私はその、まだ用事があるのです……………」

ん？姫路と一緒に帰らないようだ。まさか、雄二を待って一緒に帰るってことか？

「そ、そうなんだ。じゃあ皆、帰ろう」

俺、木下、島田、土屋をバカ面少し強引気味に教室の外に連れていく。

教室から出る間際、姫路の手に手紙が握られていたような気がした。

さて今回の試召戦争で『ゴッド・アルバイター神の勤労者』と呼ばれた実力見せてやろうか！！

## 第七話・仲間とテストとBクラス（後書き）

「ねえ藤田、最後の『神の勤労者』<sup>ゴッド・アルバイター</sup>ってなに？」

「ああそれか？ 今は教えられないなあ。今度教えるさ」

「じゃあさつさと次回予告しちやいましょ」

「そうだな」

「次回、『兄と学園とバカ騒ぎ：第八話・FとBと試召戦争』お楽しみに！！」

「島田って頭いいのか？」

「当たり前じゃない！！ 日本語さえ読めれば解けるわよ！！」

## 第八話・FとBと試召戦争

「さて皆、総合科目テストご苦労だった」

教壇に立った雄二が机に手を置いて皆の方を向いている。

今日も午前中がテストでついさつき、全科目のテストが終わり……  
昼食？ を終えた所だ。……昼ごはんのことは思い出たくない。

「午後はBクラスとの試召換戦争に突入する予定だが、殺る気は十分か？」

「……………おおーっ！」「……………」

一向に下がらないモチベーション。俺等の唯一の武器と言ってもいいだろう。

俺もやる気は十分だ。

「Bクラスなんざ、通過点に過ぎない！」俺たちが目指すものはなんだ！？」

「……………システムディスク！」「……………」

「よし、行つて来い。Bクラス代表の首を取りに行け！」

「……………サー、イエッサー！！」「……………」

「雄二、今回の試召戦争のことでちよつといいか？」

「なんだ？ 3分だけ待ってやる」

俺は雄二の隣に立ち、

ゴッド・アルバイター

「お前らは『神の勤労者』と呼ばれる物を知っているか？」

こう切り出した。

「ゴッドアルバイター？ 聞いた事無いな」

「俺は聞いた事あるぞ。なんでもバイトだけで一般家庭のサラリーマンと同等かそれ以上の収入があり、なおかつ学力は全国で5本の指に入るほどだって」

「そんなチートまがいな奴が存在するのか？」

やはり知ってるやつと知らないやつ両方いるんだな。

「その『神の勤労者』は今、ここ文月学園の2年生にいる」

「何だって！？ それは本当か！？」

「そんな奴がいたら俺たちは勝てないじゃないか！！」

「もう無理なのか……」

「おいおい。誰がAクラスにいたと言った？ ほかのクラスにいるかも知れないだろ？」

ここまででは予想通りの反応だな。だが一部の生徒はそんなに驚いてないか。

「龍槻、じゃあそのゴツドアルバイターっていうのはどのクラスにいるの？」

バカ面にはいい質問だな。そろそろ正体を明かすか。

「『神の勤労者』はこのFクラス。そしてお前らの目の前にいる」

その瞬間クラスの時間が止まった。

普通に考えればそんな勉強のできる奴がこのバカの集まりにいるわけがない。そう思うだろ？

だが俺はここにいる。だからこの話を切り出したんだ。

まあ雄二は俺が『神の勤労者』の名を出したときから気付いたみたいだが、ほかの生徒は全員驚きが隠せないといった感じだ。

「嘘だろ！？ お前がゴツドアルバイターなのか！？」

「だったら俺たちは絶対に勝てるじゃないか！！」

「Aクラス級が3人なんて勝ったも同然だ！！」

かつつか。予想通り。ドッキリ大成功だ。

これでかなり面白くなるぞ。

「さあ、戦いの始まりだあ！！」

「「「「「「「「「「！！！！！！」」」」」」」」

今回の作戦は、敵を教室に押し込むことが必要となるので廊下の戦いで四十人

を送り込む。我が軍最強の姫路もいるので負けることはないだろう。

「いたぞ、Bクラスだ！」

「高橋先生を連れているぞ！」

Bクラスのメンバーは、だいたい十人程度。

様子見といったところだろうか。

「やつらを皆殺しにするんだ！」

Fクラスの誰かの声が皮切りとなってBクラス戦が始まった。

Fクラス 武藤啓太VS Bクラス 金田一祐子

数学 69点 VS 159点

Fクラス 君島博VS Bクラス 里井真由子



物理            77点   VS   152点

圧倒的な実力差に第一陣がごとくやられていく。止めを刺される前にフオローしないと戦力が激減してしまう。

「お、遅れ、ました……ごめん、なさ、い……」

息を切らして姫路がやってきた。

僕らの全速力についてこれなかったようだ。

「姫路さん、ゴメン。来たばかりで悪いんだけど……」

「は、はい。行ってきます」

「姫路だ！ 姫路瑞希が来たぞ！」

Bクラスから、そんな声が聞こえた。

姫路さんの実力はすでに知れ渡っているようだ。

「長谷川先生、Bクラスの岩下律子です。Fクラス 姫路瑞希さんに数学勝負を申し込みます」

「律子、私も手伝う！」

「あ、長谷川先生。姫路瑞希です。よろしくお願いします」

十人ぐらいしか来てないのに二人がかりだなんて、よほど警戒しているようだ。

「『試<sup>サモン</sup>獣召喚！』」

姫路の召喚獣は大剣を軽々と持つていてかなり強そうだ。それに……

「姫路さんの召喚獣は腕輪をしているんだね」

「あ、はい！ 数学は結構解けたので……」

姫路の召喚獣はきれいな腕輪を付けていた。

「あっ！ あれって……」

「そ、そんなの、私たちで勝てるわけじゃないじゃないっ！」

急にBクラスの女の子コンビが慌て始める。

「と、とにかくよけないと！」

姫路さんの召喚獣が敵に左腕を向けた途端、腕輪が光を発した。

キュボツ！

「「きゃあああーっ！」」

Fクラス 姫路瑞希 VS Bクラス 岩下律子&菊入真由美  
数学 412点 VS DEAD & DEAD

女の子コンビはもとの点数が分からないまま、補習室行きになってしまった。

そういえば、一定の得点を超えると特殊能力がつくと聞いたことがある。

「姫路さん。すごいね！」

「い、いえ、このくらいしか役に立てませんから」

ここまでですまじいとは。Bクラスの生徒を一瞬で倒してしまった。

「い、岩下と菊入が戦死したぞ！」

「なっ、なんだと！」

「姫路瑞希、噂以上に危険な相手だ」

Bクラスの連中も動揺しているようだ。

この調子で一氣にたたみかけたいところだな。

さて俺もそろそろ動くかな。

「「<sup>サモン</sup>試獣召喚！！」」

Fクラス 藤田龍槻 VS Bクラス 野中長男  
総合 5204点 VS 1943点

「さあお前の罪を数えろ」

と某仮面ライダー風に言ってみる。きめ台詞にしようかな。

「おい！！　なんだあの点数！！　本当にFクラスなのか！？」

「何かの間違いだろ！？」

5000点越えか。まあよくできた方だな。  
さて終わらせるか。

Fクラス　藤田龍槻　VS　Bクラス　野中長男  
総合　　　5204点　VS　DEAD

一瞬で事が終わった。肩ならしには丁度いいかな。

「姫路さん、皆になんでもいいから一言お願い」

「えっ！？　あの、えっと、……み、皆さん頑張ってください！」

「うおおっ！　やったるでえーっ！」

「姫路さん、サイコーッ！」

「姫路さん！　結婚を前提にお付き合いを……」

姫路の応援の効果は絶大のようだ。

「明久、ワシらは教室に戻るぞ」

「ん？　なんで？」

秀吉は何を言っているのだろう。今、本陣に戻る必要はないと思うんだけど……

「実はBクラスの代表がああ、根本らしいんじゃない」

「根本って、ああ根本恭二？」

「うむ」

根本って確かとにかく評判が悪かったな。カンニングの常連だとか球技大会で相手に一服盛ったとか、とにかく卑怯なことで有名である。

「確かにそれなら戻っておいたほうがいいね」

「雄二に何かあると思えんが念のために」

バカ面は姫路に一言報告してから、教室に引き返した。

### 【美波サイド】

あれ？ アキ達が教室に戻っていくわね。何かあったのかしら？

「それにしても、瑞希。アンタ凄いわね！」

「いえ、吉井君達にはいつも迷惑をかけていますから少しは役に立たないと……」

「ふう〜ん」

瑞希って結構、健気けなげよね。

……アイツも、健気な方が好きなのかな？

「美波ちゃん。ボーっとして、どうしたんですか？」

「えっ！？ な、なんでもないわ。須川、戦況はどうなってるの？」

「ああ、島田か。Bクラスは強いが、数に物を言わせて今の所優勢だ！」

「そう。皆！ 多対一で勝負を挑むのよ！ 戦死しないように、フオローを入れるのよ」

アキが帰ってくるまでには決着がつきそうね。

このまま行けばだけど……

「よし……が……けつ……保健室に……」

ん？ Bクラスの連中、何か仲間内で話しているみたいね。少し気になったので気付かれないように少し近づいてみる。

「吉井が……けつ……保健室に……」

アキ！？ アキがどうかしたの！？  
耳を澄ますと段々と話し声が聞こえてきた。

「吉井が出血して、保健室に行ったらしいぞ！」

「ちよつとアンタ達、今の話はどういうことよ！」

「なんだ、お前は！？」

「いいから、今の話を詳しく聞かせなさいっ！」

アキが出血程度で保健室に行くなんて……

ウチが殴っても、保健室なんか行かないのに。

「ハッ！なんで敵に情報を与えてやらないといけないんだよ！」

『サモン  
試獣召喚！』

「……アンタ達状況がわかってないみたいね」

「何いつてるんだ？お前の方こそわかってないだろ？」

「ふう。須川！この二人をお願い！」

「了解した！サモン  
試獣召喚！」

これで大丈夫ね。

「……？ Fクラスが一人増えたぐらいじゃあ何もかわら……」

「サモン  
試獣召喚！」

「サモン  
試獣召喚！」

「サモン  
試獣召喚！」

「サモン  
試獣召喚！」

「サモン  
試獣召喚！」

「サモン  
試獣召喚！」

「サモン  
試獣召喚！」

「サモン  
試獣召喚！」

「サモン  
試獣召喚！」

化学	平均	65点	V S	140点	&	162点
Fクラス	×	10	V S	Bクラス	井上亮	& 塚本真

「なっ！？」

「アマイわね。指揮を任されている以上近衛部隊がいると思わなかったの？」

本当に状況を理解していないわね。

「須川！ その二人には聞きたいことがあるから、止めを刺す前  
でやめておいて」

「了解した！ さあ野郎ども、殺れ！！」

「うおおっ！」

「くっ！ くっ！！！」

敵も必死に応戦しているみたいだけど、あの数には勝てないみたいね。

「そこまでだ！副隊長がこいつらに聞きたいことがあるらしいから止めは刺すな！」

須川が皆に指示を出してくれた。

「さて、さっきの話を詳しく聞かせてもらおうかしら？」

「くっ！……吉井が怪我をして保健室に行っただけだ！」

Bクラスの生徒は渋々といった具合で答えてきた。

「アキは、どうして怪我をしたの？」

アキは出血ぐらいなら、慣れっこのはずなのに……

「なんでも、姫路さんのパンツを見て鼻血が止まらなくなったとか

……」

「へえ、そうなの」

普段と違う出血だから、アキも保健室に行ったってわけね。

……アキにはお仕置きが必要みたいね。

「教えてくれてありがとう。もう、いいわ」

「あ、ああ。隊長がバカで苦労してるみたいだな」

「ええ、そうね。須川！ 止めを」

「了解！ 殺れ！！」

「……………イエッサー！」「……………」

「な！？見逃して……西村先生！？ ちょっとヤダ！ 腕をつかまな  
いでください。くそっ！ 覚えていろよ！」

目の前の敵を見過ごすわけないに決まっているじゃない！

さつきから、言葉が棒読みだったり、西村先生に連行されながら、

ニヤついたりしている気がするけど変態なのかしら？

つと、そんなことより早く保健室に行かないと。

アキ、大丈夫かな？ 元気だったら、お仕置きするけど……

「須川！ ウチはちよつと離脱するから、指揮は任せたわよ」

「なっ！？ 島田、お前もか？ ただでさえ今、隊長が抜けているんだから副隊長のお前まで抜けると士気にかかわるぞ……」

「大丈夫よ！ すぐに戻ってくるから。後は頼んだわよ！」

「おっおい！ 島田！！」

アキのことが心配になって来たので急いで保健室に向かった。

「えっと……確か保健室はこっちの方だったような……」

保健室なんてめったに行かないからうる覚えね。

「ああ、こつちで合っているぜ」

「誰っ！？」

「誰だっというじゃないか？ 少なくともお前の敵だ！」

いつの間にかBクラスの生徒に前と後ろから挟まれていた。

「なんでBクラスの生徒がここにいるの！？」

「まだ分らないのか？ お前は騙されたんだよ」

「吉井は、保健室に行つてないし、怪我もしていない。お前を呼び出すのための偽の情報だったんだよ」

「じゃあ、アキはケガしてないのね？ ……良かったあ」

本当によかった。でも、今はこの状況を何とか乗り切らないと。

「ウチをここに呼び出してどうしようつての？」

あまりBクラスの生徒は来ていないのに、ウチを倒す為だけに二人もよこすなんて考えにくいもの。

「お前には、人質になつてもらおう。悪いがこれも代表の命令なんだから。一緒に来てもらおうか」

「くっ！ そんな簡単には行かないわよ！ 試獣召喚！<sup>サモン</sup>」

「お前が普通のFクラスの奴より手ごわいのは知っている。だからこそ、二人で来たんだがな。試獣召喚！<sup>サモン</sup>」

マズイわね。ウチ一人でBクラス二人を相手じゃあ、さすがに……

Fクラス 島田美波 VS Bクラス 鈴木二郎 & 吉田卓夫  
数学 178点 VS 152点 & 149点

「……お前本当にFクラスか？」



「数学は字が読めなくても解けるから、得意なのよ」  
「念に念を入れて、二人で来ておいてよかったな」  
「あ、ああ」

得点は勝っているけど、さすがに二人は……

### 【秀吉サイド】

それにしても、卑怯な輩じゃのう。この分では前線でも何かありそうじゃ。

「明久。とりあえずワシらは前線に戻るぞい。向こうでも何かされているかもしれん」

「そうだね。早く急いで戻った方がよさそうだね」

「雄二。後は頼んだからの」

「おう。俺も前線の奴らが心配になってきた。早く行ってやってくれ」

「うむ。了解じゃ」

ワシと明久は前線へと向かって行った。

「吉井に木下！ 戻ってきたか！」

「うむ。して、戦況は？」

「かなりマズイことになっている」

「えっ！？ どうして!？」

うむ。やはり、面倒なことになっていたかの。

「島田が人質にとられた」

「なっ!？」

明久が驚いているようじゃ。ワシとて、根本がここまで卑怯なのに驚いておる。

「おかげで相手は残り二人なのに攻めあぐんでいる。どうする?」  
明久の部隊はそれで動けないといったところかの。

「……そうだね。とりあえず状況を見たい」

「それなら前に行こう。そこで敵が道をふさいでいる」

ワシらは明久の部隊の人垣を抜け、その現場に到着した。

「島田さん！」

「よ、吉井っ！」

「そこで止まれ！それ以上近寄るなら、召喚獣に止めを刺して、この女を補習室送りにしてやるぞ！」

これではうかつに動けないのう。

さて、明久よ。一体どのように島田をたすけ……

「総員突撃用意いーっ！」

「隊長それでいいのか！？」

「明久！？もう一度よく考えるのじゃ！」

明久の奴は何を考えているのじゃ。

……まさかと思うが、日頃痛めつけられている仕返しじゃ……何を考えているのじゃワシは。友人を疑うなど、あつてはなんののに。

「ま、待て！！吉井！！」

さすがに敵も動揺しておるようじゃ。仲間であるワシ自身も驚いているからの。

「コイツがどうして俺達に捕まったと思っている？」

「馬鹿だから？」

「殺すわよ」

明久！？お主一体何を考えておるんじゃ！？

「コイツ、お前がケガをしたって偽情報を流したら、部隊を離れて一人で保健室に向かったんだよ」

ほう。島田もなかなか思いやりがあるのう。

「島田さん……」

「な、なによ」

明久も鈍感じゃが、さすがにこれは気づいたようじゃの。

「ケガをした僕に止めを刺しに行くなんて、アンタは鬼か！」

「違うわよ！」

「明久よ少し冷静になるのじゃ」

「何を言ってるの秀吉？ 僕はいつも冷静だよ？」

……明久に気付かせるには本人に直接告白させるしかないようじゃな。

「ウチがアンタの様子を見に行っちゃ悪いっての！？ これでも心配したんだからね！」

これなら明久も恋愛と関係なくても、心配されて嬉しいじやろつ。

「島田さん。それ、本当？」

「そ、そうよ。悪い？」

少し頬を赤く染めながら島田が顔をそむける。  
ふむ、いい雰囲気じゃの。

……なぜかこう、胸の奥がチクチクするがの。

「へっ、やっとわかったか。それじゃ、おとなしく……」

「総員突撃いーっ！」

「どうしてよっ！？」

「なんでじゃ！？」

最近、明久のことが本当に分からなくなってきたの……

「あの美波は偽物だ！ 変装している敵だぞ！」

なぜ、そういう結論に達したのじゃ？

演劇部のワシでもあそこまで完璧な変装はできないのじゃが……

「おい待てって！ コイツ本当に本物の島田だって！」

「黙れ！ 見破られて作戦にいつまでも固執するなんて見苦しいぞ！」

「だから本当に……」

Fクラス 田中明&須川亮 VS Bクラス 鈴木二郎&吉田卓夫  
数学 65点&59点 VS 33点&18点

敵はだいぶ弱っていたようじゃの。一撃で二人の召喚獣は止めを刺されてしまったの。

「ぎゃあああ……！」

「たすけてえ……！」

西村先生に連れて行かれる生徒二人。

南無……あれは、さすがにワシも冷静さを保って受けてられないからの。

「皆、気を付けろ！ 変装を解いて襲いかかってくるぞ！」

「よ、吉井、酷い……。ウチ本当に心配したのに……」

「まだ白々しい演技を続けるか！ この大根役者め！」

さすがにこれは、島田がかわいそうじゃな

「明久よ。ワシが思うにあれは本物の島田だと思うんじゃが」

「そうよ。本当に心配したんだから」

「ウソだっ！ 美波はそんなことを言ったりしない。皆取り囲むんだ。いくらBクラスでも、この人数なら勝てるから」

「本当に『吉井が瑞希のパンツを見て鼻血が止まらなくなった』って聞いて心配したんだから！」

「包囲中止！ コレは本物の美波だ！」

やっと、気がついたようじゃの。

……ふむ。時すでに遅しという言葉の意味が良くわかるのう。

「島田さん大丈夫だった？」

「……」

「無事でよかったよ。心配したんだからね」

「……」

「教室に戻って休憩するといいよ。疲れているでしょう？」

「……」

「それにしても、卑怯な連中だね。人として恥ずかしくないのかな？」

「……………」

明久よ。再び会えると信じておるぞ。

ワシは無言のままこの場を去った。

## 第八話・FとBと試召戦争（後書き）

「姫路、すごいな。400点越えなんて」

「いえ、それよりも藤田君のほうがすごいじゃないですか。5000点以上取るなんて」

「そうでもないさ。妹のために頑張っただけだ。そんなことより次回予告するか」

「そうですね」

「次回、『兄と学園とバカ騒ぎ：第九話・協定と反乱とバカの活躍』お楽しみに！！」

「藤田君の妹さんに会ってみたいです」

「今度、誕生日会やるからあえるさ」

## 第九話・協定と反乱とバカの活躍（前書き）

10000アクセスを超えたら特別話を書きたいと思います。

## 第九話・協定と反乱とバカの活躍

「……ここはどこ？」

どうやらバカ面が目を覚ましたようだ。

「あ、気がつきましたか？」

姫路が心配したようにバカ面に声をかけた。

「心配しましたよ？ 吉井君ってば、まるで誰かに散々殴られた後に頭から廊下に叩きつけられたような怪我をして倒れているんですから」

それ正解。

「明久、良く生きておったの」

木下が少し声を震わせながら言う。

「本当だな。こいつは不死身なのか？」

「まあ、なんとかね。それで試召戦争はどうなったの？」

バカ面が畳から身体を起こす。不死身と言えど痛そうだな。

「今は、協定どおり休戦中じゃ。続きは明日になる」

ああ、そういえば雄二がそんな条約を結んだって言っていたな。

「戦況は？」

「予定どおり教室前に攻め込んだ。もともと、こちらの被害も少なくなはないがな」

雄二がこちらの被害が書かれたメモを読み上げる。

「妨害があつたけど、今のところ順調ってわけだね」

俺らが教室を離れている間に机などが根本の策略によってボロボロにされたらしい。

根本は、策略が雄二と違ってセコイな。

「……………（トントン）」

「お、ムツッリー二か。何か変わったことはあつたか？」

気がつけば土屋が来ていた。

今回、土屋は相手が根本って事もあつて情報収集の役割だった。



「ん？Cクラスの様子が怪しいだ？」

「……………（コクリ）」

土屋の話によると、どうやらCクラスが試召戦争の用意を始めているとのこと。

Aクラス相手に考えている訳がないな。

「漁夫の利を狙っていると考えるのが普通だな。だがCクラスなら、話は別だな」

「えっ！？ どうして雄二？」

「根本の野郎はCクラスの代表と付き合つてると、ある奴らから聞いたことがあるからな」

「Cクラスの代表と！？」

「ああ、だから間違はなく手を組んでいると考えた方がいいかなるほど。」

「と言つうことは、Cクラスの狙いは僕達？」

「まあ、そうなるな」

さすがに連戦は避けたい所だがな……

「本来なら連戦は避けたいから、Cクラスに協定を結びに行くんだが根本はそれを読んで、罠をはってCクラスで待っていると思う」

「それじゃあ、どうするの？」

「Cクラスとの戦争を回避する方法は別にあるから問題ない。根本については……暇だしCクラスに行つてからかって来るか」

根本もまさか、からかう為に雄二が来るとは思つてないだろう。

「雄二、僕も行くよ！」

雄二だけじゃあ、酷いことになりそうだし

「おう、じゃあ行くか」

「んじゃ、俺も行くか」

「Fクラス代表の坂本雄二だ。代表はいるか？」

Cクラスの教室にはまだかなりの人数が残っていた。やっぱ試召戦

争の準備をしてるようだ。

「私だけど、何か用かしら？」

確か小山だったかな？バイトで忙しいから覚えてないや。

「いや、悪いがアンタじゃない。その後ろに隠れてるクズ（根本）のことだ」

「なっ！？」

「どうした。何を驚いている？」

本当にこいつは人をいじるのが好きだなあ。

「なぜ俺がここにしていると分かった！」

「さて、なんでだろうな。まあ、クズが考えそうなことなんて分かりそうなもんだけどな」

「くっ！　あまり調子に乗るなよ坂本！　戦争に負けた時、ホエズラをかくなよ？」

確かに根本は卑怯だが、今だけみると若干かわいそうな気がする。

「それはお互い様だろ？　もっとも俺は、負けるつもりはないがな」

「雄二。自分から仕掛けておいて、負けるつもりな人はいないと思うよ？」

「確かにそうだな。だが、明久。人には、勝てない勝負でも戦わなければならぬときがあるんだ」

「そうだな雄二……」

「……雄二？」

俺と雄二はそろって遠い目をしていた。

「おいっ！　何、三人の世界に入ってるんだよ！」

「根本君、あんなのに構ってちゃダメよ！　アイツらは、そういう噂が流れてるんだから」

噂？　なんのことだ？

「まあ、何とでも言っておけ。戦争に負けるのはお前たちだしな」

「なんなのっ！？　アンタ達Fクラスでしょ！！　根本君に勝てる訳ないじゃない！！」

小山が声を張り上げて言う。彼氏をバカにされて怒ってるのか。

はっ！このリア充が！！

「まあ、そう大きな声を出すな。やってみなくちゃ分からないだろう？」

「分かるわよ！FクラスとBクラスじゃあ、学力に差がありすぎるじゃない」

「小山さん、学力だけが強さじゃないよ」

「バカにはバカなりの戦い方があるんだ」

「えっ！？何を言ってるのよ？」

小山は本当に分かっていないようだ。

Fクラスはそれを証明するために戦っているといっても過言ではない。

「一人ひとりの強みを生かすことが強さにつながると思う」  
「……………」

「ふんつ。だが、圧倒的な力の差には無力だけだな」

「僕達がこの戦争に勝ってそれを証明してみせる」

俺達は負けるわけにはいかない。

「良く言ったぞ、明久。ここはもう十分だ帰るぞ」

「そうだね」

「バカ面なりによくやったじゃないか」

「あ、アンタ達覚悟してなさいよ。その、……アンタ達がBクラスに負けた後にすぐに宣戦布告しに行つてやるんだから！」

Cクラスを出た後も小山の声が聞こえてきた。

小山つてヒステリックなのか。

俺等は、小山の声を聞きながらFクラスへと帰って行つた。

「ただいま」

「あつ！アキお帰り」

「それにしてもお主たちも暇じゃのう。わざわざ、からかいにCクラスまで行くとはの」

俺は特に何もしていないんだけど

「美波、姫路さんがどこにいるか知らない？」

教室を見渡しても姫路の姿が見えない。

「瑞希？ さっきあわてて教室を出て行ったけど、どうかしたの？」

「ちよつと用事があつてね。姫路さんを探してくるよ」

バカ面はそう言つて教室を出た。

そういえば島田とバカ面が互いの呼び方を変えたな。

さっきのバカ面が半殺しになったときになんかあつたんだな。

### 【吉井サイド】

「おい、バカ面。朗報だあの根本が姫路を校舎裏まで呼んで何か仕出かすらしいぞ」

「え、それ本当！？」

「俺がそんなことで嘘をいつてどつする。嘘をつくなら雄二くらいだ。いや雄二でもそんなことはしないな」

「ありがとう龍槻。じゃあ行つてくるよ」

「ああ。期待してるぞ。学校一のバカ」

……あの野郎ブチ殺す！！

僕は一度、職員室に寄つてから根本の元へと向かった、

根本とは、校舎裏に向かう途中の廊下で会つた。

手には手紙のようなものが握られていた。

「根本、用件は何か分かつてるよね？」

「吉井か？ 何か雰囲気が違う気がするんだが……」

「……姫路さんの手紙を返せ」

「っ！？ 何のことだ？」

「お前がしたことは知っている」

「俺がタダでお前に手紙を渡すと思うか？」

そんな奴だったらこんな真似はしない！

「もちろんタダじゃない。僕とお前が模擬戦をして、僕が勝ったら手紙を返してもらう」

「お前が俺と？ くくつ。確かお前、観察処分者だろ？ 学年を代表するバカがBクラス代表の俺と戦って勝てると思ってるのか？」

僕は、親友がよく口に出している言葉を使わせてもらう。

「世の中、学力がすべてじゃない。だから、お前には負けない」

「なるほどな。じゃあ模擬戦でお前が負けた場合はどうするんだ？」

「なんでも言うことを聞く」

「ほう、なんでもか。それは大きく出たな。いいぞ。そこまで言うならその勝負乗ってやるよ」

僕が連れてきた五十嵐先生にお願いをする。

「先生、Bクラス代表 根本恭二に模擬戦を申し込みます！」

「二人とも、分かっているとは思いますが、模擬戦は試召戦争に係はありませんからね？」

先生が確認をとってくる。

「ええ、もちろん分かっていますよ。だが、学年を代表するバカは分かっているかもしれないかもしれませんが」

「まだ、バカの方が卑怯者よりはマシだ！」

「なんだとっ！！」

「二人とも口を慎むように。では、フィールドを展開します」

化学のフィールドが展開された。

姫路さんの為にもここは負けられない。

「「試召喚！（サモン）」」

Fクラス	吉井明久	V S	Bクラス	根本恭二
化学	83点	V S	179点	

「この点差でも勝とうとするなんてお前はやはりバカだな」  
一番得点がとれている教科を選んだが、だいたい100点差近くある。

これは、キビしい。

「さっきも言っただけど学力がすべてじゃない！」

「はっ！ 勝手にほざいている！」

根本の召喚獣がカマを振り上げて襲いかかってきたが僕は少しの動作でそれをかわし、すれ違いざまに胴を木刀で薙ぎ払う。

「何だっ！？」

Fクラス 吉井明久 VS Bクラス 根本恭二  
化学 83点 VS 168点

やはり一撃では、あまりダメージを与えられないようだ。

もつと一度のチャンスに複数叩きこまないと

「なぜ、俺の召喚獣がダメージを負う？ お前の方が点数が低いのに」

どうやら僕のことを調べていないようだ。大方、観察処分者っただけで甘く見て調べなかったのだろう。

「だから言っただけやなか。学力がすべてじゃないと」

「くっ！ だが、まだ俺の点数はお前の倍以上ある。まともに一撃が入ればお前の負けだ！」

たしかにその通りだ。だけど僕は負けない。

「やあああっ！」

こちらからも攻めて一気に倒す！

根本の召喚獣の防具の隙間を狙って攻撃する。根本はそれをよけようとせず、そのまま攻撃してきた。

Fクラス 吉井明久 VS Bクラス 根本恭二  
化学 71点 VS 152点

「ぐっ！」

腕にカマがかすったようだ。腕に痛みが走った。

「どうした？　そういえば、観察処分者は召喚獣の痛みがフィードバックするように設定されていると聞いたことがあるな」

根本がニヤつきながらこちらを見てくる。

「こんなの、痛くもなんともない！」

「くくっ！　お前よくそんな状態で勝負を挑んできたな」

根本は笑いながらも突っ込んできた。カマは攻撃範囲が広くてよけにくい。

もっと相手の冷静さを奪わないと。

「やってみなくちゃ結果は分からないからね」

木刀で片方のカマの軌道を変えながら、もう片方のカマをよけた。

ガラ空きの顔面にパンチを繰り出すがあまりダメージはないようだ。

「……坂本もそんなことを言ってやがったな。お前らを戦争で潰す前にここでお前を潰して、その言葉が薄っぺらなものだと教えてやる！」

根本の召喚獣が大振りになって来た。おかげでよけやすいけど、一撃でも当たったら致命傷だ。

だが、おかげで勝利の芽が出てきた。

「根本、お前が姫路さんにしたことは絶対に許さない！」

「だからなんだっ！　お前はここで負けるんだよ！」

激しい攻防が続く。

Fクラス	吉井明久	VS	Bクラス	根本恭二
化学	56点	VS	128点	

「そろそろ、止めを刺してやる！」

根本の召喚獣がひととき大きくカマを振りかぶった。その瞬間、僕は召喚獣を突っ込ませた。

「バカが自ら飛び込んでくるなんてな」

確かに無謀なように見えるかもしれない。だけど勝つチャンスはここしかない！

根本の召喚獣のカマが僕の召喚獣に振り下ろされる直前、召喚獣の木刀が根本の召喚獣の首を貫いた。

「勝者！ Fクラス 吉井明久」

先生が宣言する。

「ばつ、ばかな！？ 何で俺がこんなやつに負けるんだ？」

「根本、姫路さんの手紙を返してもらおうか」

「……………」

やはり素直に渡してこないか。

「根本君、事情は分かりませんが約束はしっかり守ってください」

「くっ！ これだろ」

渋々といった具合で、手紙を出してきた。前に見たものと同じだから、間違いない。

先生を証人としても連れてきておいてよかった。

「根本、僕はお前が姫路さんに謝らない限り、絶対に許さないからな」

僕はそう言つてFクラスへと戻って行つた。

「バカ面、どうやらうまくいったようだな」

教室に戻る途中で龍槐が声をかけてきた。どっかから見てたのかな？

「何とか取り戻したよ。ほらこれ」

「かつかつか、上出来だ。今日からバカ面じゃなくてバカ久つて呼んでやるよ」

「結局バカの部分は変わらないの！？」

「当たり前だ。んなことよりそれをさっさと姫路に届けてやれよ」

二人でFクラスへと戻っていった



## 第九話・協定と反乱とバカの活躍（後書き）

「バカ久、今日はよくやったな。この調子で姫路とのフラグを立てたらどうだ？」

「な、何をいつてるんだ龍槻！！そんなことをしたら異端審問会に……」

「ああそうだったな。まあその前に島田に殺られるかな。んなことより。次回予告するか」

「早くやろうか」

「次回、『兄と学園とバカ騒ぎ：第十話・バカと終戦と良い所取り』お楽しみに！！」

「バカ久、島田と異端審問会がこっちに來てるぞ」

「えっ！？ そんな馬鹿な。ちょ、うわあああああ！！」

## 特別話・妹と仲間と誕生日会（前書き）

10000アクセス突破したんでその記念に特別話です。  
それと更新のペースが落ちるかもしれません。勉強とかいろいろあるんで。

## 特別話・妹と仲間と誕生日会

今日は土曜日。

訳あって今日のバイトは全部休んでいる。つまり高校生らしく普通の休日だ。

なぜ休んだのか、それは今日が夢華の7回目の誕生日だからだ。今年の誕生日はバカ久や雄二達が来る事になっている。

いつも苦労かけてるから今日ぐらいはゆつくり寝させてやろうかな。午前はあんまりすることも無いだろうし。

まあ俺は足りない分の食材の買い出しとか、誕生日会で出す料理の下準備とかでいろいろと忙しいんだが。ああ忙しい、忙しい。

やばい、こんなことしてたらもう10時半じゃないか。もうそろそろ夢華を起こさないと。

ガチャ。

ん？ なんだ？

「ふわあああゝおにいちゃんおはよ〜」

「おう。おはよう夢華」

なんだ起きてきたのか。起こす手間が省けた。

「お兄ちゃん忙しいから顔洗って、台所にご飯置いてあるから食べてて」

「わかった〜」

寝ぼけてるのめっちゃかわいいな。

つとそんな事よりも準備、準備。

そして昼頃。

「「「「「「「「「「「おじゃましてーす」「」「」「」

みんなが来た。

「今日はご飯が食べられるらしいからね。楽しみだよ」

「祝う気がないんなら帰れ。バカ久」

「ちゃんとあるさ！ 食べ物のに！！」

「祝う気無いなてめえ！！」

「龍槻。その辺にしておけ。その馬鹿は世界一の馬鹿だ」

「ああそうだったな。っとみんな今日はよく来たな。玄関にいるのもなんだから上がってリビングにいてくれ。妹を呼んで来るからなみんなが上がってリビングに移動した。

「あ、土屋」

「……………なんだ？」

「今日さ、うちの妹の写真撮ってくれないか？ ちゃんとお礼するからさ」

「……………分かった」

「じゃあよろしくな」

夢華は自室「俺と一緒にの部屋」にいるだろうと思っていたのだがリビングにいたようだ。

「なんだリビングにいたのか。紹介するよ。俺のたった一人の家族。夢華だ」

「えっと、きよ、今日は、私の為に来てくれてあ、ありがとうございましゅ！」

そういつて夢華はお辞儀をした。

あ、最後の最後で噛んだか。

「まあ自己紹介は各自ですててくれ。俺は料理の準備をしなくては」

「龍槻、手伝おうか？」

「じゃあ俺も手伝うぞ。あつちはムツツリー二達がやってくれるだろうからな」

「私も手伝いましょうか？」

バカ久と雄二が手伝うと言った矢先に姫路も手伝うと言出した」

「よかつたら私も手伝いますけどいいですか？」

「「いや、こっちは十分だから座っててくれ」」

「そうですか……じゃあ夢華ちゃんとお話しますね」

姫路はどこか寂しそうにリビングへ戻って行った。

……危うく大切な家族を失うところだった。

「さ、さて始めるか」

「そ、そうだね」

「おう」

それで数分後

「さーて料理できたぞー」

「「「「おおー」」」」

準備をしていた俺達が料理を運んできた。

今日は夢華の好物、ちらし寿司と普通の握り寿司とマカロニサラダだ。

「龍槻、これ全部あんたが作ったの？」

島田が驚いたように聞いてくる。

「当たり前だ。ちよつとこいつらに手伝ってもらったが全部俺が作った」

「お主はいつたいどれだけのバイトをしておるのじゃ？」

「ん？ えつと和食、洋食、中華、洋菓子、和菓子、パン、その他いろいろだな。言つとくけど俺がバイトしてる飲食店は接客とかじや無く全部厨房で料理を作ってるからな」

「すごいですねー体のほうは大丈夫なんですか？」

「お兄ちゃんって言ったどれだけのアルバイトしてるの？」

みんながみんなかなり驚いているようだ。まあ無理もないか。

「さあ、そんなことよりも早く食べようぜ。今日は夢華の誕生日会だからな」

そしてみんなで食べ始めた。

「これおいしいね」

「確かに美味しいな」

「本当においしいのう」

「……………美味」

「すごいおいしいですね」

「なんでこんなにおいしいんだろう」

「やっぱりお兄ちゃんの料理が一番だね！」

「かっかっか。だろ？　そう言われると嬉しいぜ」

「やっぱりおいしいと言われると嬉しいもんだな。」

そしてみんながいろんな会話も挟みつつ料理を食べていった。

みんなが料理を食べ終わった頃

「さてケーキ出すかな」

「……………おおー」

「んじゃ、持ってくるな」

キッチンに行き、冷蔵庫の中から朝に作ったケーキをだす。

「夢華、誕生日おめでとう！！」

「すごいな。これも作ったのか？」

「うらやましいです」

「はははっ。一般技能だって」

「いや、それは一般技能とは言わんぞ？」

ケーキを人数分に切り分け、渡していく。

「まあ食後で食べ辛いとは思うが遠慮せずに食べてくれ。まあその前に」

「……………夢華ちゃん、誕生日おめでとう！！」

みんなが声をそろえてお祝いの言葉を送った。

「みなさんありがとうございます！」

今度は囁まなかったか。ちょっと残念だな。

またさっきと同じようにみんなが口をそろえておいしいと言ってい

た。

ケーキを食べ終わってからみんなは帰ろうとせず夢華と一緒に遊んでいた。

結局バカ久達は夕方まで遊んで行った

「夢華、今日は楽しかったか？」

「うん！ みんなといっぱい喋ったりして楽しかったよ！」

「そっか、ならよかった。あ、そうだこれお兄ちゃんから夢華への誕生日プレゼント」

「え？ 本当！？」

「ああ、夢華の好みがよく分かんなかったから気に入らないかもしれないけどな」

「といって俺が取り出したのは手作りの髪飾りやシュシュなどだ。」

「うわぁ〜かわいい〜お兄ちゃんありがとう！！」

「そうか、喜んでくれてよかった」

「お兄ちゃん、これ私につけてくれる？」

「ああいいよ」

夢華は自分のヘアゴムを取って今プレゼントしたシュシュをつけて欲しいと言った。

そして俺はシュシュをつけた。

「似合ってる？」

「うん、似合ってるよ」

今日は楽しかった。またみんな呼んでやりたいな。

## 第十話・バカと終戦と良い所取り

「ただいま」……やっぱり、さすがに誰もいないか」

「当たり前だ。何時だと思ってんだ俺も早くバイトに行かないとな。遅刻しちまう」

いろいろあつたせいで、教室に帰ってくんのが結構な時間になっていた。

「えつと、姫路さんの席は……あれ？ まだカバンが置いてある。こんな時間まで学校にいるなんて、物騒だな」

「何か用事でもあつたのか？」

と言いつつもバカ久はカバンの中にラブレターを返しておく。

「吉井君……！」

「ふえ？」

後ろから突如声をかけられバカ久は情けない声を出してしまった。なんだ姫路、戻ってきたのか。

「な、なに？」

「吉井君……！」

「ど、どうかした？」

どうやら俺は帰ったほうがいいな。このあとが気になるが邪魔をするわけにはいかない。

ということで見つからないようにこっそりと教室から出て行った。

【吉井サイド】

姫路さんの様子が明らかにおかしい。カバンをいじっている所を見られてしまったのだろうか。なら姫路さんは今、とても怒ってるんじゃない……

「こんな時間まで一体どうしたんですか？ 何か用事でもあつたんですか？」



と思っていたが拍子抜けした。なんだ、いつもの姫路さんじゃないか。

「うん、ちよつとね……あつ！　そうだ姫路さん、これ……」

「あつ！　私の髪留め。どこかに落としたと思って捜してんです」

「教室に落ちてたから拾ったんだ。うさぎの形をしてるから、すぐに姫路さんのものって分かったよ」

「ありがとうございます……髪留めを私につけてもらってもいいですか？」

「うん。別にいいけど……」

僕は言われるがままに、姫路さんにウサギの髪留めをつけてあげた。

「その、このウサギ、似合ってますか？」

「うん、似合ってるよ。姫路さんと言えばウサギ。ウサギと言えば姫路さんってくらい」

「……そうですか。吉井君、確認したいことがあるんですけど……」

「」

「ん？　なに？」

「私のカバンに入っているコレって吉井君が取り返してくれたんですよね？」

「なんのことかな？」

「ふふつ。誤魔化しても駄目です。龍槻君から話は聞きましたから、あいつが。なんかこういうのって、少し恥ずかしいな。」

「……吉井君。後ろを向いてくれませんか？」

「へっ？　いや、別にいいけど……ほわあぁっ!？」

後ろを向いた瞬間、姫路さんが抱きついてきた。

「えっ!？　ちよつと姫路さん!？」

「手紙のことありがとうございます。なくなったとき本当は凄く心配したんです」

姫路さんが僕に抱きつきながら話を続ける。

「吉井君って本当にズルイですよ。手紙のことで気持ちが高ぶってるのに、この髪留めのことだって……」

姫路さんの目は遠くを見ていて、心ここにあらずの状態のようだ。何を言ってるか分からないけど、自分に話しかけているみたいな気がする。

「昔から本当に優しくて、皆の中心で私の憧れで……」

姫路さんの声がどんどんかすれていく。

正直この状態は、嬉しいけど姫路さんを正気に直す方が優先だ。

「姫路さん？ その、大丈夫？」

「ふえ？ あ、え、えっと大丈夫です」

正気に戻って僕から離れる姫路さん。

……なんか凄くもつたいないことをした気がする。

「そ、その、今のは手紙をとり返してくれた感謝の気持ちで……」

「えっ？ う、うん」

わ、分かっていたけど……その何というか……

僕らの間に少し気まずい空気が流れる。

「えっと……姫路さん一緒帰ろう？ こんな時間だし、家まで送って行くよ」

「そ、そうですね。じゃあ帰りましょう。明久君」

僕達は自分達の家へと帰って行った。

あれ？ 何か今違和感が……

### 【龍槻サイド】

「さて、早速だがCクラス対策の作戦を実行する」

翌朝、登校した俺等に雄二は開口一番そう告げた。

「えっと、……ああ、そういえば昨日言っていたね。それで何をするの？」

「秀吉にコイツを来てもらう」

雄二がとりだしたのは、文月学園の女子生徒用制服。

……雄二それはどうやって手に入れた？ そしてお前に何があった？  
「それは別に構わんが、ワシが女装してどうするんじゃ？」

「秀吉には姉の木下優子として、Aクラスの使者を装ってもらう  
なるほど。それが狙いか。」

「というわけで秀吉。用意して来てくれ」

「う、うむ……」

雄二から制服を受け取り、木下はその場で着替え始めた。

「ちよつ、秀吉？ こんな所で着替えちゃだめだよ！」

「そうよ、木下。ちゃんと女子更衣室に行つて着替えてきなさい」

「む？ ワシは男なのじゃが……」

「諦める。大事なのは、事実と関係なく世間がどう見てるかだ！」

「雄二！？ お主だけはワシの味方だと思つていたのに……」

「木下つて男だろ？ なんで女子更衣室何かに行つて着替えてくる  
んだ？」

「龍槻。どうやら味方はお主だけのようじゃ……」

「ダッシャアアア！！」

「おわつ、明久。何をする！ いきなりキレる十代か！？」

「ウッシャアア！！」

「何を怒っているか知らないが、少し黙れ！」

「ぐふっ！」

雄二の拳が的確にバカ久の鳩尾をとらえた。

「さて、バカが黙った所で作戦を続行するぞ」

何事もなかったかのように話し合いが始まる。

「それで、ワシはこの格好でCクラスにいけばいいんじゃない？」

「ああ、そうだ。行くぞ」

「二人とも待つて、僕も行くよ」

「よし、じゃあ俺も行くか」

「さて、済まないがこの辺りからは一人で頼むぞ、秀吉」

俺等がCクラスの近くに来た時に雄二がそう、つぶやいた。

「気が進まんのう」

「そこをなんとか頼む」

「むう……仕方ないのう……」

「悪いな。とにかくあいづらを挑発して、Aクラスに敵意が向くようにしてれ。演劇部ホープの実力を見せてもらうぞ」

「期待してるぞ。木下」

「ふむ、いいじやろう。ワシの実力を見せてくれよう」

さすが雄二だ。秀吉の演劇魂に火をつけたようだ。

意気揚々とCクラスに向かって行く。

「雄二、秀吉は大丈夫かな？」

「演劇の実力については良く知らないが大丈夫だろう」

「そうだな。まあ木下なら大丈夫だろ」

雄二が無責任なことを言ってる。

『静かにしなさい、この薄汚い豚ども！』

……うわぁ。

「秀吉、凄いね」

「俺もここまでとは……」

「同感だ。流石演劇部ってことだな」

もう、何もしないで帰ってもAクラスに敵意が向くんじゃないだろうか。

『な、何よアンタ！』

『話しかけないで！ ブタ臭いわ！』

木下、自分で話しかけておいてそれはあんまりだと思う。

『アンタ、Aクラスの木下ね。ちょっと勉強ができるからって調子に乗ってんじゃないわよ』

やはり、知名度でいったらAクラスの木下の姉貴の方が有名か。まあ、木下は女装してるから見破れるわけがないんだが。

『私はね、こんな醜くて臭い教室が同じ校内にあるなんて我慢ならないの！ あなた達なんて豚小屋で十分だわ！』

『なっ！言う事欠いて私たちはFクラスがお似合いですって！？』

小山、Fクラスは豚小屋じゃなくて廃屋だ。

『手がけがれてしまうから本当は嫌だけど、特別に今回は貴方達をふさわしい教室に送ってあげようかと思うの』

演劇部ってここまで出来ないといけないのか？

『ムキヤー！ アンタ絶対に許さないわよ！！ 絶対に倒してやる！』

『そう、せいぜい頑張ってね。……無理だと思うけど』

木下は最後に呟くように言い残して教室から出てきた。

「まあ、こんなものじゃな」

どこかスッキリした様子で木下が近づいてくる。

「あ、ああ。さすが演劇部ホープだな」

「凄いな」

『木下優子、絶対に許さないわよ。アンタ達！ 絶対にあの女だけは倒すのよ！！』

『おおっ——！！』

どうやらCクラスは完全にAクラスに攻め込む気のようなだ。

「雄二、僕らがAクラスを倒す前にCクラスが倒す……なんてことはないよね？」

「だ、大丈夫だろ。確かに、この気合の入り方は予想外だがAクラスは別格だからな」

「ふむ？ 雄二でも予想外なことがあるんじゃないの？」

俺の中に複雑な感情が湧いて来た。

恐らく雄二もだろう。複雑そうな顔をしてる。

「ゆ、雄二。作戦もうまくいったことだし、教室に戻らない？」

「そうだな。いつまでもここにいても仕方がないからな」

「では、戻るとするかなの？」

「そうするか」

後、十分で今日の試召喚戦争が始まる。

俺達は教室に向かって歩き出した。

「ドアと壁をうまく使っくんじゃ。戦線を拡大させるでないぞ！」  
木下の指示が飛ぶ。

その後Bクラス戦が開始され、俺等は昨日中断されたBクラスの前から進軍を開始した。

雄二からの指示は一つ、『敵を教室内に閉じ込める』とのこと。

「おらおらあ！！ さっさと戦死しやがれえ！！」

『ゴッドアルバイター  
神の勤労者』こと俺が突撃していく。

そういえば俺って『万年五月病発症者で中二病持ち』の設定が無かったか？ まあいいかそんなこと。

ちなみに俺の召喚獣は赤い軍服に召喚獣の背丈の2倍ほどある日本刀という装備だ。

「こいつ昨日もいたやつだぞ！！」

「10人がかりで押さええちまえ！！」

はっ！無駄無駄あ！！お前らが俺に勝てると思うなよ！

Bクラスの生徒が10人ほどでこっちに向かってくるがそれも一瞬で戦死になる。

「なんだこいつ！？」

「桁違いすぎるだろ！？」

だいぶ道を開いたな。もういいかな。

「姫路、今だ！」

「はいっ！」

姫路が反対のドアからBクラスに突入していった。

「根本君、覚悟してください！」

「なっ、やはり姫路ここまで来たか。だが一人で突っ込んでくるなんて甘いな！」

姫路の周りを近衛部隊が囲む。

「いくらお前でも、そいつら全員を相手にするのは無理だろう。そいつらを倒したとしても周りはBクラスの連中ばかりだぜ？ 飛び込んでくるなんて愚の骨頂だな！」

「いいえ、これでいいんです。私の役目を終わりましたから」

「はあ？ 何を言っている？」

確かに姫路は僕等にとって頼れる存在だ。だがFクラスには、まだ切り札がいる。

- ・なぜ、Dクラスにあんな交渉を持ちかけたのか
- ・なぜ、多少無理をしても戦線を押上げたのか
- ・なぜ、姫路さんを単独で教室に突入させたのか

すべてはこの状況を作るため。暑さでBクラスの窓を開けさせ、近

衛部隊を根本からはがし、Bクラスの注意を一点に集中させるため。

ダン、ダンッ！

屋上よりロープを使って二人の人影が飛び込み、生徒と教師の二人分の着地音が響きわたる。

「……………Fクラス、土屋康太」

「き、キサマは……………！」

「……………Bクラス根本恭二に保健体育勝負を申し込む」

「ムツツリイニーーーーッ！」

周りの連中が気がついて援護に入ろうとするがすでに遅い！

「……………<sup>サモン</sup>試獣召喚」

Fクラス 土屋康太 VS Bクラス 根本恭二

保健体育 441点 VS 203点

ムツツリーニの召喚獣は手にした小太刀を一閃し、一撃で敵を切り捨てる。

今ここに、Bクラス戦は終結した。



## 第十話・バカと終戦と良い所取り（後書き）

「土屋。今日はよくやったな」

「……………当たり前だ」

「つてかものすごいいいところ取りだよな」

「……………そんなことよりも次回予告だ」

「次回、『兄と学園とバカ騒ぎ：第十一話・Bと戦後と次なる目標』お楽しみに！！」

「にしても俺と同等に戦えるやついるのかなあ」

「……………おそろくない」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0118n/>

---

兄と学園とバカ騒ぎ

2010年12月9日15時20分発行